

麻 生 路 郎 主 宰

川柳雜誌

第十卷 十一月號

東京句會記念號



大正十三年三月三日第三種郵便物認可
昭和八年十一月一日發行(每月一冊一日發行)
第十卷 第十一號 川柳雜誌社發行

清 酒

白鶴禮讀

白鶴をチントンシャンと提げて来る
午後六時 白鶴が待ち妻が待ち
百事宜の如く白鶴呑んでゐる
白鶴の機嫌へ押す子曳き出す子
腰掛へ白鶴狭う飲むうまさ
來意も聞かず 白鶴の猪口を強ひ
白鶴が縁とはなりぬ君と僕
白鶴に素直な父となつて寝る

攝津灘

嘉納合名會社釀



關東川柳家に深謝す

本社創刊十周年記念事業「東京句會」に就きましては、豫てより絶大なる御聲援を賜りましたのみならず、當日はわざわざ御光來を忝ふし、お蔭様にて豫想以上に盛會を極め、川柳史上特筆すべき有意義なる會合たらしめられましたことは、本社として欣幸に堪えないところであります。何分遠隔の地のことで思はざる不行届の點も多かつたことゝ存じますが、不惡御諒承を願ひ上げます。

茲に謹んで御禮申上げます。

川柳雜誌社

主幹 麻生路郎

各位の熱烈なる御後援により、日本柳壇の東京句會の光景、陸離たる一帯の光景、今尚ほあれ等のものあり、たれ等があれ等のものあり、われ等は、これ等の歴史的事的、な句會に参列の榮を擔つた事、的、な句會に参列の榮を擔つた事、永に不忘る、能はぬ喜びと、遙に各位の深甚なる御配慮を、御禮申し上げます。

各位の熱烈なる御後援により、川柳雜誌社「東京句會」の光景、なる盛會裡に終了せしめられたり、るは客員として我等も又感激でお禮申します。

前川龜大谷田上井三鳥雀郎
田上井三鳥雀郎
橋本生
福田山
吉田水
高橋新
朝田萬
庄田八
生會根
大西井
平井機
竹内蒼
川柳雜誌社「東京句會」の光景、なる盛會裡に終了せしめられたり、るは客員として我等も又感激でお禮申します。



川柳雜誌第十卷第十一號目次

柳俳無差別論を排す

福田山雨樓……(六)

武玉川初篇研究(十八)

梅本秋の屋
森子省二魚……(三八)

是空庵より

長野吉高……(四)

中央柳壇より全國に叫ぶ

……(三四)

雜筆春秋

青い歌姫

正岡蓉……(五)

建擢のこと

森東魚……(五)

秋

西田艸樂……(五)

評月 鼎座の中から

丹路、鮎美、山雨樓……(六)

現代江戸印象記

住田亂耽……(五)

日本名所川柳 大阪の巻「築港」

麻生路郎選……(五)

柳壇畫報

……(四)



東京遊走記

(四三)

宴果てゝ 竹内機見女
中禪寺より 橋本緑雨
抜け詣り 庄萬よし
握手 吉田水車
すべてOK 村松夢裡
こんな嬉しい目に遇ふた 平井春光

わても出たかつた 高橋かほる
印象二つ 住田亂耽
東京一瞥 朝田新水
下町娘 石曾根民郎
東京斷章 生田翠夢

近作柳樽

麻生路郎選 (三)

川粒柳塔集

麻生路郎選 (三)

一路集 壁剝刀

前田五健選 (五)

各地柳壇

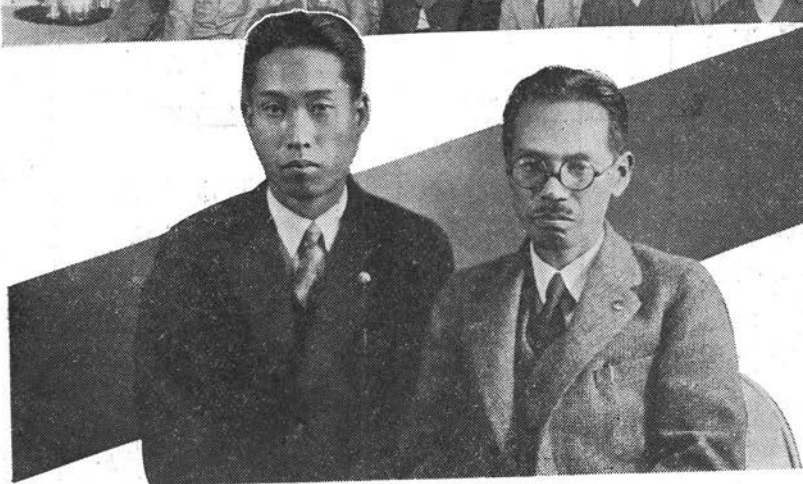
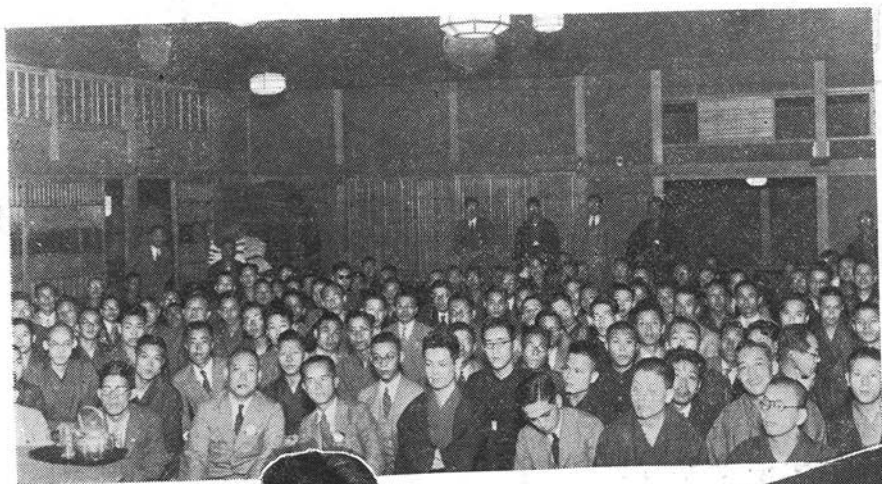
廣江天痴人選 (五)

本社十月例会 須崎豆秋記 (五)
西之町MEMO 橋本緑雨 (五)
編輯の窓 福田山雨樓 (四)
題字 麻生路郎
表紙「勝利之神」 柴谷宰二郎

(五)

報・畫・壇・柳

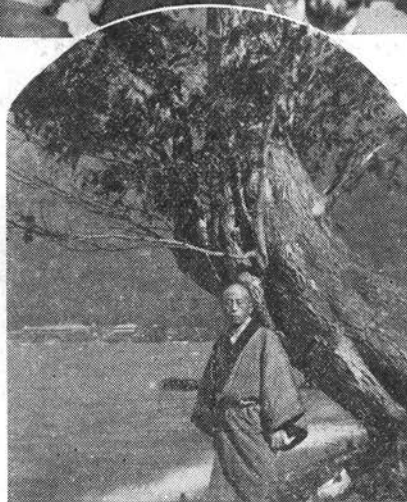
午時五後午日五十月十年三三九一「會句京東」社誌維柳川
堂一豪巨の壇柳西東・催開て於に部業俱木益前門雷草邊京東
〇す量を觀の會大柳川園全し會に



版大・夕日七二月九年三三九一・念記行刊「嘆潮」集句柳川
耽風田住者著は左てつ向・催開會句念記行刊に坊の端内之島
《影攝君足鶴木黒》幹主郎露たれさ筆執を文序のそは右・若



熱上席「會句京東」るせ催開て於に部樂俱本直 (上)
 〇姿雄るた々個の幹主郎路生廠の社本ふ陣を



社本だん遊に寺園中・日聖の「會句京東」(中)
 ・経臨雨線本偶の

君路柳娘岩人同社本の時當たしを入河熱 (下)
 の此・兵隊の軍國洲滿はのるへ見に方道
 なご士の國めれさ殺銃・旗砂の帯一近附
 月ヶ四後見發體死の尉少郎西權本石たつ
 (影獵日六二月一年三三九一)





柳俳無差別論を排す

福田山雨樓

最近柳俳無差別論が柳壇の各所に烽起して一つの傾向とても稱すべき機運さへ見える。金澤の「梅鉢」では安川久流美氏が「柳俳無差別講座」の下に本年五月號から七月號迄續けられ、大阪の「手」七月號では木村半文錢氏が「柳俳無差別と手の使命」と題し之を論ぜられ、京都の「川柳街」八月號では川井舜二氏（氏は京都柳壇屈指の論客であつたが去る八月三十一日長逝せられた由、誠に痛惜に堪えぬと共に拙稿に對し氏の批判を斯待し得ぬことは甚だ残念である）が「川柳俳句の相違點問題」に付て檢討せる柳俳無差別の詩論を掲げた。「手」は既に柳俳無差別の觀點に立つて作品を示してゐる。

僕はこの柳俳無差別論には甚だしく不賛成であるのみならず川柳の立場から默過し難いものがあるので、聊か所信を述べて辨駁を試みたいと思ふ。

先づ久流美氏は「俳句と川柳の差別を撤廢せよといふ事は、頗る大きな問題のやうに見ゆるが、實は手易い事としたい。季

題及切れ字の約束ある俳句を自由に詠ましめ、從來の川柳畠が人事以外自然を詠めば其處に必然的の俳柳一致を見るのである」と稱へ俳句季題の桎梏を難しその例句をあげて叙法上それを川柳表現には仕立直すことの容易さを説き「人事を主とする川柳のエキスを井泉水一派の俳句にあからさま吸収されてゐるのに對し、川柳（和句）も俳句のエキスを擧取する要がある事を考へさせられた」と述べ最後に「柳俳が既成の體をぬぎ捨て、眞の掘手する所に「句」の眞價がある」と結んで柳俳味の統一を要望してゐられる。

俳句から季題の約束や切れ字などを捨てれば容易に川柳たり得ると云ふのも、随分大まかな見方であるし、それはこちらで勝手に好んでやつて見るだけの話で、何も敢てしなければならぬ理由にはちつともあり得ない。そんなことは季題や切れ字を尊奉し、これあるが故に俳句としての本格的詩趣を覺ゆる俳人達から見れば、おほきにいらぬお世話だと云ふだらう。又そんな生やさしい季題や切れ字ではない筈だ。それから俳句がどしどし川柳の畠に這入るからこちらからも乗り込んで、自然のエ

キスを搾取る要があるとは幼稚な繩張り論である。川柳を確固たる信念の下に文學するならば、何等俳句の侵入を恐れる要はなく、堂々門戸を開放しておき、同時に川柳詩の擴充の爲に必要とあらば、堂々と自然現象への觸手を延ばすに躊躇はいらない。斯る狭い量見であることが既に俳句に一籌を輸する所以だと言はれても仕方があるまい。

三

次に半文錢の論據は「川柳と俳句——それは然し祖先を同じくし、同じ國民の手で詠はれる短詩である以上、何日の日か再び合流する機運のあることは否めまいと信ずる。殊にこの合流機運は近年に於て最も著しい。それは十七字音數の定型律より自由律に進む同じ歩みと云ひ、川柳より俳句の自然觀へ、俳句より川柳の人間及び社會觀へ、それ／＼突入することに於て、兩者の關係はぬきさしならぬ緊密さにまで置かれてゐる」と見「斯うした俳句に似た川柳、川柳に似た俳句を、一律に人間詩として取扱ひ、兩者の持味を巧みに突き合せ、混和せしめると最後に、ほんとの意味の俳柳無差別觀から生じた一短詩が創造せられ」これが「時を前提として必至の歸結である」と述べ「要は川柳とか俳句とかの名稱にこだはる必要のないまで、お互の生活と藝術とが接近してゐるのだ。それは定型律から自由律への解放であり、文語脈から口語體若しくは散文化に展開する、短詩の宿命的歸趨に他ならぬ」と結んでゐる。

これはしかし大分危い議論であり獨斷であると思ふ。川柳と俳句とが同じ祖先から生れ、同じ短詩である故を以つて自由律

を契機として合流すると見るのも、そしてそれが時を前提として必至の勢ひであると斷ずるのも、餘り根據のない説ではあるまいか。これは恰度、これから商賣を始めやうとする兄弟に等分の投資を投へておけば、末では必ず合同してやるものだと定めてかゝるのと同じで、偏見と云ふの他はない。生活と藝術とが接近して川柳とか俳句とかの名稱にこだはる必要はなく、短詩として宿命的にそこへ落付くものと見るのは、柳俳無差別の理論でも何でもなく、柳俳無差別を夢み且つ自由律に頼り過ぎるものゝ一つのドグマでしかあり得ない。そんな議論が成り立つならば何も川柳と俳句だけに限つた問題ではなく、あらゆる短詩を包括した問題に擴大されてしまふ。

四

舜二氏の檢討に依れば「川柳と俳句は過去に於て如何なるものであつたかといふ點においては明確に區分する事は出來得る即ち今日に到る發達の經路より別個だつたのである。一はより多く自然を對象とし、一は日常生活瑣事を捕へた一は用語季節尊重の風強きものがあり、一はそれに反するの自由さがあつた。彼の個性的であり、是の社會的であつた事も差違として重要なるものであつたらふ」と相違點を述べ「しかしそれ等は詩本來の要素としての差異でなく、時代及社會性に伴ふ現象的な相違でしかなくあつたのであり」「松窓句集に就いてみるとき初期の松窓には古川柳の臭味が幾分見出されるが近年の作には全然さうした穿ち、滑稽、輕味は見受けられない。全人格を傾注した生活詩として、芭蕉が没入した全生活的な境地と非常に接

近じてゐるのが見受けられ」「近代川柳の動向は、純正詩への明らかなる接近として、喜ぶべき傾向にある」と稱し更に「川柳なる名稱の故を以て、柄井川柳の境地を理想としなければならぬのであるなれば、吾々はいさぎよく「川柳」なる名稱を捨てゝもいゝ。吾々の求むるものは名稱「川柳」ではなくして吾々の心にある「あるものゝ叫び」そのものである。その完成である」と絶叫してゐる。これは今にして考ふれば實に悲壯なる宣言であつた。地下の舜二氏に鞭打たれる點は尠くないが、駁論は駁論として捧げたいと思ふ。

即ち舜二氏の説に依れば、古川柳の特質たる穿ち、滑稽、輕味は俳句との相違點として認めるが、そんなものは古川柳に限つての差異で、近代の川柳は生活詩としての動向を示し芭蕉が没入したやうな境地に接近して來ており、社會的狀勢が異つた現代に於ては古川柳的價値は望むべきでないことを高調したものであつて、恰も近代川柳は俳句と握手したものゝ如く言ひ觸らしてある。ところが川柳の向上云々の言葉もあるところから見れば、俳句との提携が最後の理想ではなく、川柳は川柳としての進展を望む上から古川柳耽溺者に痛棒を與へたい意圖だつたと思はれる。然るに新らしき川柳の向ふべきところは「あるものゝ叫び」と抽象的に片付けてしまつたのでは、遂に氏の川柳に對する精神は那邊的に存したかを察するに餘程の昏迷を感じざるを得ない。つまり、氏の所論は柳俳無差別への必然的理論を捕えたものでなく（この點が甚だ曖昧である）川柳と俳句との本質的相違迄に對する論旨も不徹底且つ妥當を缺く憾み

がある。

五

以上反駁を試みた如く、三氏の説は何れも柳俳無差別の必然性を闡明にしたものではなく、柳俳の接衝點に於て偶々入り交つたところだけを目して、早計にも兩者が合同し又は合流すべきものゝ様に斷定した、一つの謬見に終つてゐると思ふ。

元來柳俳に共通點、相似點又は接衝點のあることは、その發生過程から見ても或る程度止むを得ぬことである。しかし似たものは飽く迄似た別箇のものであつて、遂に同じものではあり得ない。それを似たもの同士一緒にしやうと謀ることは、その何れもの長所美點或は特異性を殺して、結局つまらぬどつちもつかすのものを作り上げるのが關の山である。必ずつまらぬとも定められないが、少くとも各々特色ある兩者それ自身の持味は大半失はれるであらうことは想像に難くない。柳俳無差別の結果にはさう云ふ危險が確かにあることと思ふ。にも拘はらず柳俳無差別が免れ難き必至の狀勢にあるなどと煽動し、暗にこれを慫慂する態度を示すなどは、川柳家として眞に川柳の爲めを深思する者かどうかを疑ひたくなる（この川柳の爲めと云ふのは、川柳の藝術運動を指すものであつて、射利的功名的の意味ではない）

俳句と川柳との本質的相違點は、その形式や素材にあるのではなく、實は制約された詩の精神、即ち俳味、柳味と云ふ詩趣の添加に依つてかゝるのである。俳句が自然を禮讃し、自然と交錯する人生を讚美する季節尊重的詩であると稱されるのは、

此の俳味を重んずる所以であつて、日本の風土に育まれて、日本の自然を母胎としておのづからに現はれた獨特の短詩である。川柳はユーモア、諷刺、穿ち、輕味、諧謔、皮肉、機智、洒脱等を愛好し讚美する人間味中心の短詩であつて、そこに柳味と稱する制約された詩の精神が宿るのである。この柳味を基調として展開される境地に詩趣を求め、その表現に依つて素の人間性に迄達到しやうとするところに川柳の誕生があり、斯る風懷を性格的に撰擇しそこに興趣と愛着とを寄する柳人に依つて川柳の精神は永遠に保持されるのである。

斯る定義めいた言葉は何時、誰が定めたか知らない。しかし犯し難い概念として僕は遵奉したいと思ふ。又川柳なり俳句なりの概念をしかと把持せぬ程危険な漫步振りはないと思ふ。

六

川柳は何處迄も川柳としての独自の境地があり、その境地を最もよく發揮した作品が尊いのであつて、このことを強調し抗辯する信念が川柳家としてなくてはならぬと思ふ。無論川柳家であつて同時に俳句を作るのは差支のないことではあるが、この場合決してどつちつかすの句であつていゝと云ふ譯のものではない。そして川柳俳句の兩者を併せ鑑賞し、創作し得るが爲めに輕々しく俳句の川柳化を試みるが如きは、心ある俳人に笑はれる結果を招くばかりでなく、自らその何れをも失ふこととなる惧れがある。假りに俳句の川柳化を或る程度迄果し得たとしても、その詩趣に於てしつかり川柳の精神を捉へてゐないならば、所詮幼稚なる川柳の俳句化に終るのであつて、ミイラ取りがミイラになるの愚を學ばなければ幸ひである。

「人間詩」を標榜して柳俳の短所を棄て、長所を採り、そこに自家創造の一短詩を展創するなど、云へば、素晴らしく精彩を帯びた賣出し言葉に聞えるが、その觀點に立つて生れた句そのものが、どつちもつかすの獨りよがりや、生まの主觀語や、ゴツ／＼した荒削りのものであつたならば、徒らに新傾向俳句の後塵を拜する終るであらうことは、單なる杞憂ではないと思ふ。自由律川柳の出現を契機として、柳俳の合流が問題視さるゝことは止むを得ない。そしてそこに川柳詩の没落過程が忍び寄つて来るやうに、危惧の感を抱くのも一應は無理からぬことである。けれども今少しく周到なる留意の下に之を觀察すれば、斯る杞憂は決して問題でないことがわかるであらう。即ち自由律川柳は今日に始まつたことではなく、既に十數年以前に於て其の出現を見たのであるが、必然的に柳俳無差別短詩に迄轉向した結果、早くも飽和状態に達してもろくもその姿を没してしまつたのである。これは誠に見えすいた話で、句そのものに何等の魅力も興味も迫力もないから自他共に飽いて来るのは自明の理である。所謂幻滅の悲哀に終るのだ。

柳俳無差別の短詩は斯くして華々しく短かい運命を脊負はねばならぬ、と信するのであるが、一面自由律川柳の動向が誠に眞摯な出發であるから、これを大きな眼で注視すると共に、翻つて何故自由律に趨るか、何故定型律に據つて新境地を生み出し得ぬかを再検討し、併せて定型律が馴致し易い作句の行詰りを打開する用意を忘れてはならない。

最後に柳俳無差別論を排撃するのは積極的に、川柳のよさを再認識せよと云ふ精神に他ならぬことを附言する。



近作柳樽

路郎

選

息かけて拭くはいびつの硝子なる
 父らしく見えねどしみる兒の臭ひ
 あぶあぶを喰はせて上る若い父
 後から前から犬もうれしいぞ
 はろ苦く戸を音立てて開けるなり
 あきのかぜはそきからだをなづるなり
 ともしびに愚寵の鼻が光るなり
愚寵君ご盛んに柳談
 静太君へ
 戀の句へ静太の眉が淋しいな
 まん丸い顔をしてゐて倉庫番
 家族制度よしと思ひぬ秋の色
 女學生等の合唱芒路曲がある
 銅像の顔へ焚火のけむりあげ

大阪

香川

壺ヶ池

大阪

大 同 同 三 同 同 同 眞 同 同 同 舟
 門 汀 弓 々



口繪では夫人箒を把り給ひ
 灯を前の強請大きなかげを持ち
 妊娠鑑定へ男がついて來てるなり
 若夫婦の部屋へ聞こえる母の咳
 乳呑み兒の顔よこれてる大掃除
 約束を狂はす友の身を案じ
 カフェーの鏡歪んだ僕の顔
 弱點がフツと言はした捨科白
 稲穂うつ風心臓にこそばるし
 夕立は俺に嬉しき共鳴者
 戀人の歩みのまゝに渚行く
 せんりゆうはかなしわたしのかけらをひろふ
 月もない星きみおもふもないむねのやまひをにくむ
 すきなひとだまつてとほりすぎてゆく
 鼻唄もよいぞ衰しき雲がゆく
 おととゐもとよと風の日のこゝろ
 みれば落葉もひとりぼちをなくすがた

同

憂ヶ池

大聖寺

同

同

同 同 裸 同 同 柳 同 同 輝 同 同 静 同 同 寒 同 同

子

太

亭

次

人



環境は理智の女と呼ばせたり
 嫂と思ふ意識に縛られて
 川に來て米とぐ鮮女故郷の唄
 肉體の方はたやすく救はれる
 傷魂にグラスの底のさくらんぼ
 心臓にくらき隈もち夜勤する
 病んだ事かくして職をもとめてる
 びくりと動いて蠅とりがみの蠅
 郵便の過ぎて寂しむ皿の梨
 あこがれに似しこゝろなり窓を開け
 掌にのせて蟲のいのちのいとしまれ
 水藥の瓶もつめたく秋を病み
 面會に程よい嘘を知つて居る
 戀しさへ遠く港の灯がまばら
 出張所井戸の不便があるばかり
 嘘つけば強く目にしむ葉雞頭
 假睡をむさぼつて居る肋骨
 出した手にまだ運勢は悪く云ふ

大
阪

松
江

神
戸

同

同

大
阪

堺

銀 同 巷 同 同 吉 同 同 榮 同 同 千 同 同 青 同 同 道
 波 二 左 二 世 女 踏 子



大 阪 は 戀 し く 腹 の 兒 を 思 ひ
 末 の 子 を 里 子 と き め て 通 夜 は 更 け
 青 空 の そ の 日 生 れ た 男 の 子
 靴 下 の 穴 を 忘 れ た 隠 し 藝
 ヘ ア ビ ン を 拾 っ て 女 蚊 帳 を 出 る
 虫 賣 り に 聞 け ば 捕 ま り に く い 虫
 内 職 の 今日 も ズ ボ ン を 焼 く 匂 ひ
 職 の ある 誇 り 煙 草 を 咥 へ て 出
 又 人 を 減 ら す 機 械 の 基 礎 工 事
 天 の 川 女 は 純 な こ と を 云 ふ
 ま た 傘 を 返 し そ こ ね た 秋 の そ ら
 秋 の 鉢 金 魚 の 腮 に ある 疲 れ

秋 季 演 習

長 野

京 都

大 阪

高 知

八 幡

松 山

新 潟

岡

同 有 貴 同 春 映 同 十 同 春 同 善 同 岩 同
 爲 代 光 珠 七 峰 知 石
 郎 志 光 珠 八 峰 鳥 石



故郷で晝寢の味を教へられ
 戀人へ寶塚から出して置き
 ウィスキー男愁ひを捨てたがり
 縋帶の指思ひ出す風呂の煙
 新米かしてバス嬢は足をけり
 溜息をつく程女喋り過ぎ
 鶏頭と並び鶏思案する
 梨一つ噛む間に暗記する若さ
 簾入に着せた浴衣を干してゐる
 踊り行く灯はあかと遊女町
 智慧熱と氣づいて朝の眼がいたい
 やつと立つ兒へ晩の膳狭う喰ひ
 星光るころまづしき夜なりけり
 片假名もまじり女の手紙來る
 丘に來て故郷へ續く線路見る
 療養の指導を頼むとは淋し

阿波踊を見る

親友 君入院

東京

佐保蘭

松江

同 翠句樓

大阪

同 九文錢

愛媛

同 宵明

大阪

同 氷炭

兵庫

同 九天

磐ヶ池

同 松雨

同

同 青鬼

同



蚊の死骸つまんで外の風へすて

同

巷巴

秋の陽をこゝにあつめて子等遊び

同

一沫

山に來てはるかに浪の音があ

同

同沫

つかまへた虫の片足折れてゐる

同

同沫

天下茶屋女の堕ちてゆくところ

大版

鬼怒夫

前鼻緒不貞腐れたやうに伸び

同

同末

食ふ犬で結構ですと頭下げ

同

末廣

轉向したk氏へ

思想は遠くシペリヤの雪明り

同

同利

拂はせて禮も云はない友嬉し

同

同利

一つよりない隠し藝強いるなり

同

同梨

黒眼鏡社會にすねた姿なり

高知

梨生

いつからか抜帯を嫌う娘となりぬ

同

同絹

ひまな時つく溜息をさとりれる

松江

絹子

エプロンを捨てゝ母のふところ戀し

同

同莞

生活の爲なら煙草も吸ひますわ

同

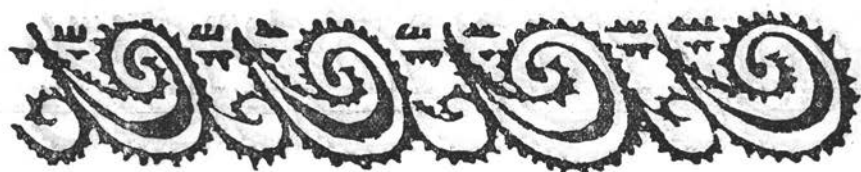
莞路

妹の猿を見て

いちぢくの如き乳房がはち切つた

同

同莞



共有の財産ふやすことに汗
 惑星と言はれ煙草をすふてゐる
 ヒステリー我子を前に口走り
 水葬に心細なる移民團
 云ひ分が通らぬ朝の霜柱
 ルンベンのまだ起きてゐぬ天王寺
 母の腫にちと派手過ぎる柄は戀
 性病みていつそ風雨の續けかし
 はたき止めて柳誌ひろげば秋匂ふ

新學期始まる

みんな出掛けた座敷大きく掃き出す
 煙りく諸謔もある眞晝煙
 起きて居る主人へ釘を派出に打ち
 解職へ葉書一枚刷つたもの
 果報など思はず母と二人きり
 マルクスを父母の寢息の中で讀み
 無帽主義金に苦勞のたへぬ顔

神戸

名古屋

大阪

同

兵庫

大阪

同

神戸

幸捐

同茶

同青兒

同迂均

同吟女

同千兩

同木主

同

麥刀子



豆腐屋笛吹くと夕べが騒ぐ
 木魚々々お前も苦勞性です
 改造を讀む夕べ夕顔咲きぬ
 事もなく丸き茶碗に箸をつけ
 懷舊をビールの泡が取りもちぬ
 うたゝ寝の足へ感じる子の力
 六尺のカンナとなつて秋が澄み
 金もなく戀もない日の恙なし
 俺だつて土の情も知つてゐる
 晩酌へ揉瓜の出來瓜の出來
 麥稈の帽子へブドウ買つてくる
 汗のシャツ脱がす女房が待つてゐる
 ちんちろりんだけでは戀も出來ません
 籐椅子に届かぬ戀をもたせかけ
 机にもお膳にもなる暮し向き
 ノツクする手を六感がやめさせる
 行水の湯と冷えた麥酒の妻となり

京都

尖衛子

今治

十 靜

大阪

素 月

名古屋

三 都

高知

鐵 吉

大阪

同 萌

同

同 舟

同

同 蛙

同

多 郎



味噌汁を薄の食堂儲からず
 お世辭とも知らず子供は又唄ひ
 女給すら顔を背ける年になり
 凶報持つ人に夜行の蟲は啼き
 道草の子等も見てゐるちぎれ雲
 魚つりのつれないものはにがい顔
 たいそうにおいしやへ自動車で行き
 こめかみの白毛忘れた計劃よ
 金持の心に成れと云やるのか
 借金も何れあらうに踊つてゐる
 むつとして立てば風鈴襟に鳴り
 顔おぼえられてると知るバスガール
 怠屈な窓へ煙草の煙が逃げ
 去年とに異つた髪で踊つてゐる
 憂鬱の捨て場に窓があるばかり

登踊り

阿談踊

大 阪 京 都 大 阪 京 都 大 阪 京 都

(十才) 英

同 菊 月 子 同 同 杏 竹 正 某 今 鵜 愁 法
 路 鬼 彦 三 雅 甫 人 雨 夫 雨 泉 子



明滅もむなしく更けたネオンの灯
 落ちたは蚊である生活の焦點がない足元
 思想轉向に窓の陽のあたゝかし
 父の文平假名片假名有難し
 すき透るインク洋酒を偲ばせる
 仙境に在つて投資忘れかね
 虫なく夜又読み返す良い手紙
 純情の手紙女給に破られる
 いのちなき砂を握りてもものなかし
 店先で煙草と云へばバットくれ
 お見舞にあらで喋りに來た女
 月給の順に座つて慰勞會
 豚に嘲笑はれまいぞ秋の風
 むし壽しに五人の舌がもつれつき
 純益は子の小遣にたらぬ金
 一回春へまだく遠い長廊下
 一仕事して朝飯の味を知り

夏型せの友に

今治 登ヶ池 同 同 松江 大聖寺 神戸 和歌山 同 同 同 同 大坂 加賀 松江 兼川 登ヶ池

小蝶柳榮冬 春燦翠一元葉一寒義舍羅縷
 松々生吉生 彦宵穗羊山 杯草子行門江
 風



臺所四五年程の音がする
 物蔭へ余の儀に非ず金の事
 二の口が出ぬ程妻に意見され
 カルビスは涼し故郷の雲匂ふ
 深酒をたしなめられた晩をねる
 朝霧へ荷馬車の影が薄らぎて
 病む母へ女給リンゴを買ふて来る
 公休の疲れを土産物に見せ
 かみそりのかざみおくれ毛が目立つ朝
 母になる身なり弱さが氣にかゝり
 大風は出さうにもなく陽が昇り
 裏のある涙危うく溺れかけ
 立てば座はれば膝へもつれる子
 せめて齒を磨くに今日を忘れたし
 年々に縁の値札を下げてゐる
 懐手バード小錢をちやらつかせ
 名月が一ふくしける松の上

同 同 同 大阪 廣島 兵庫 島根 同 同 同 大阪 島根 臺灣 同 同 同 同

公 子 確 火 操 耕 青 是 佐 み 伊 喜 虚 承 窮 芳 良 笛
 子 煙 川 朗 波 を 美 つ 勢 郎 心 春 巢 一 佑 秀

本社創立十周年記念

東京句會

路郎主幹病軀を挺して

中央柳壇より全國に叫ぶ

柳壇劃期的の一大壯舉

オールジャパン川柳大會

榮光の日！昭和八年十月十五日は遂に來た。本社創立十周年記念事業の一つとして、此夏發表以來待望久しうした「東京句會」は文化の中樞帝都の地に於て華々しく開催された。

本誌が川柳の社會化を主唱して茲に十星霜。その間幾多の難關と困苦とを突破し或は排除しつゝ、ひたすらにこの重大使命のもとに邁進して來た甲斐あつて、今や川柳の社會化運動は澎湃として柳壇の指導精神をリードし、着々其の成果を収むるに到つた。而して路郎主幹が會て提唱した柳壇三十年計畫の第一期、即ち川柳の量的發展が略完成の域に達して來たわけである。時恰も本誌創刊十周年を迎えたので、此の記念すべき好機會に際し、本社は遙々東上して句會を開催、從來努力を續け來たりたる經過を報告すると共に更に將來に對する本誌の使命と抱

負とを聲明すべく、一大決意を以てこの壯舉の敢行に當つたのであつた。

幸ひ東都及全國に於ける著名川柳家諸氏の熱烈なる聲援と贊助とを頂き、殊に東京、横濱の方々から會期の繰合せ並に會場借入等に對し多大の便宜を供與せられたる結果萬事都合に運び、茲に川柳史上特筆すべき雄圖「東京句會」を開催することが出來たのは、本社の非常に欣幸とするところであり、感謝に堪えない次第である。

時はこれ金風颯々の候。當日は薄曇りなれど絶好の句會日和會場——淺草雷門前の「並木俱樂部」の階上——は地理的に最も足場よく且つ優に數百名を包容し得る廣壯典雅の場所であつたが、大阪方面より馳せ參じた路郎主幹以下十四名の同人社友

によつて着々準備が進められてゐる内、定刻(午後五時半)を待ち兼ねて續々詰めかけられ、午後六時過ぎにはさしもの廣き會場の大部分が、親愛なる柳友諸兄によつて埋められるの盛況であつた。中にも遠く函館の晟修氏、青森の浪人氏、白河の五花村氏、さては御病氣中のところを押して參會下さつた森井荷十氏、御多用のところを暫くなりとも懇談したいとてわざわざ御出席下さつた岡田三面子氏を始め、本句會開催に付き豫て贊助を賜つた東京及横濱の著名川柳家の大部分が、續々と參會せられ、殊に劍花坊、久良伎兩先生が相前後して來會せられ、本句會をして一段の光彩を與へられたことは、甚だ感謝に堪えないところである。

午後七時半席題々切と共に、本社同人福田山雨樓君開會の辭を述べ、次に主幹麻生路郎氏の講演に移る。主幹は大阪出發前齡からす健康を害してゐたので、旅の疲れと共に未だ身體が平常に復してゐなかつたけれども、今此の機會に臨み勇を鼓し敢然として立ち、約三十分に亘り大要次の如く獅子吼した。

「第一に東京句會を開催した理由をお話したいが、その前提として川柳雜誌が設立された趣旨を語らなければならない。即ち本誌創刊當時(大正十三年三月)迄は川柳の雜誌と云へば川柳に趣味を有つてゐる極めて少範圍のものの相互間の内輪の發表紙、又は少し進んでゐるものでも、同人雜誌としてそのグループだけの見る雜誌でしかなかつた。しかしそんな程度であるとは何時迄經つても、川柳を社會的に認識さすことは到底出來ない。川柳の雜誌を大きくすることは出來ない。どうしても社會へ示すに足るものを出さねばならぬ、と云ふ點に着眼して、その意味に適するやうな雜誌を社會へ送り出す計畫のもとに「川柳雜誌」は出現したものである。従つて雜誌の名稱の如きも「川柳雜誌」と云ふ一般的な川柳の綜合雜誌らしい名前をつけ、句の選又は原稿の如きも、自分の主張に對して應援された全國各地

の大家に依頼し、記事も通俗平易を旨とし一面初心者指導誘掖に努むる等、専ら川柳の社會化運動目的貫徹の爲め終始し、雜誌の月刊斷行も其の實を示した。其の他機會ある毎に、誤まれる川柳觀の打破排撃に努むると共に、社會化運動の爲めに東奔西走し着々其の實績を擧げて來た。」

と從來の苦闘を語り、「幸ひにして我が社のこの主張は時代の要求に觸れ、漸次其の効果を奏し、一面他の有力なる柳誌も、わが社と同様の精神において、盛んに實行運動を試みた結果、自分が曾て提唱した三十年計畫の第一期即ち川柳の量的發展も、最近の十年間で或る程度迄行き渡つて來た。

そこでわが社は昨年五月本誌の百號記念事業として、大阪文化最高の殿堂たる朝日會館に於て「川柳の夕」を開催し、千餘の聽衆を集めて川柳社會宣傳の總決算の一大示威運動を成し遂げたのであるが、本年は本社十周年に當るので、この記念すべき好機會に際し記念事業の一つとして東京句會を催し、本社の從來努力を續けて來た徑路を語り、更にこの十周年を一轉機として第二期の運動に着手すべきことを、聲明したいと考へたのであるが、東京は文化の中樞地であるから、この地から全國に向つて叫ぶのが一番有効適切なる方法だと信じた。」

と本句會を東京で開催した次第を述べ「今後川柳界の動向は、自分が曾て提唱した三十年計畫の第二期、即ち川柳の質的向上に専ら主力をそゝいて、協力邁進する必要あり。」と叫んで參會者の深き反響を呼んだ。

主幹の熱辯は次第に高潮して、久良伎、劍花坊兩氏の談に及び、先輩の犠牲排撃のことを強調、又は川上三太郎氏の心境と柳壇問題に論及し、最後に本句會がオールジャン川柳大會の觀を呈した盛會振りに就いて、深甚なる感謝の意を述べ、柳友諸氏の健康を祝福して壇を下つた。次に本社客員前田雀郎氏、

同川上三太郎氏より夫々挨拶を述べられた。

前田雀郎氏 (挨拶)

「本句會の成功に付て實は相當懸念しておつたのだが、麻生主幹以下同人社友諸君の熱と意氣に動かされてこの盛會を見たことを喜び、東京柳人の融和性と其の前途に對して樂觀を持つていゝと思ひ、いざといふ時には協力一致する江戸っ子の氣分を披瀝して關西の諸君への土産としたい。」

次に川上三太郎氏は例によつて頗る諧謔に富んだ話術でもつて

川上三太郎氏 (挨拶)

「今朝僕は麻生君の一行を東京驛へ出迎えに行つて、十六人が列車からぞや／＼と降りて來たときの顔を見て、はつと驚いた。何れも緊張した面持ちであつた。全く川柳雜誌の方々の元氣には感心するに至りである。今晚出席者は既に百五十名を突破してあるさうであるが、斯る盛會を見たのもこの熱心さに動かされた東京柳人の總意であらう。關西の方々がお歸りのときには盛んに見送りをせねばならぬ。」

次に劍花坊、久良俊兩先生から祝辭を述べられた。先づ劍花坊氏は壇に立たると、うんと身をそらしておもむるに開口一番

井上劍花坊氏 (祝辭)

「大阪で僕の一番組から知つてゐる川柳家は故六厘坊で、その次に麻生路郎君である。その路郎君が今斯くの如く東京で句會をやることは、甚だ壯舉と云はなければならぬ。此の場合祝辭なんでものはもうこの心持で盡きてゐるのである。が一言自分の所懐を述べさせて貰ひたいと思ふ」

と前提して、先生獨特の川柳藝術論、王道川柳、革新川柳を論じ

「團結もいゝが争ふのもいゝ。川柳には絶へず改革が必要である」等々氏の言論は漸次熱を帯びて來り、意氣軒昂たるものがあつた

「これからのことは若い人に頼む。劍花坊も後進諸君の意見を聞いて共に進みたい。友人同様につき合つて貰ひたい」と大變謙遜的な挨拶であつた。

次で久良俊翁は完爾として登壇せられ

坂井久良俊氏 (祝辭)

「雀郎君は心境一致と云ふことを説いたがこれは仲々一朝一夕には出來ぬ、」と云ふやうなお話しからたちまちに童顏紅潮を帯びて翁一流の、川柳は個人詩に非ざる説を滔々と述べられ、轉じて「昨年大阪へ久し振りに行つたとき路郎君は古川柳の句材と新しい川柳のことについて話されたが、あれは單なる作句上の問題に過ぎぬ」と論難されるかと思へば、「川柳の精神は社交が第一である」等々縱横無盡に快辯をふるはれ、最後に「路郎君一派が道を違はせず遙々東京へ乗り込んできた壯圖は喜ぶべく、羨ましく思ふ。この次は東京からも大阪へ行つて大いに協調を遂げられたい」と圓滿に結ばれた。

×

次に和田天民子氏から寄せられた祝辭を本社同人庄萬よし君が代讀、續いて全国各地より頂いた祝電を朗讀し、了つて席題の披露に移る。次いで路郎賞をかけられてある兼題「大空」の披露があつて、非常な盛會裡にこの記録的な句會の幕を閉じた。この時富士野鞍馬氏の發聲のもとに「川柳雜誌社」の萬歳を三唱され、最後に八十島杜若氏の音頭で芽出度手を打つて頂き午後九時四十分幾多感激の渦を残して散會した。

×

散會後東都川柳家有志諸君の幹旋で、向島秋葉神社境内、元「むさしの」跡「大和田」に於て懇親の宴が張られた。各自紹介に歡談に、十二時過ぎまで大いに盃を傾けて東西交驛の握手が堅く交された。出席者は次の三十六名。

久良俊、三太郎、雀郎、迷亭、杜若、鞍馬、周魚、壽山、眞砂、佐保蘭、蒼梧樓、花川洞、茶六、雨吉、玉鬼朗、夢一佛、琴莊、玄六、山門、太郎丸、不倒人(東京) 最修(函館)不浪人(青森)五花村(白河)民郎、松本、路郎、綠雨、萬よし、かほる、山雨樓、新水、水車、八歩、亂耽、機見女、春光(大阪)

長崎 卯 秀

長崎柳秀
 神尾三休
 宮尾しげ
 中島紫痴郎
 大窪文芳
 丸よし
 はりこ吟社
 加能川柳社
 尼館柳社
 廣縁之助
 廣江天痴人
 松江支部
 御池橋支部
 神戸支部

祝

今や柳界は怪疑時代に在り動もすれば川柳の圈外に奔らむとするの傾向なきに非ず柳人は其の嚮ふ所に迷ひて或は俳句の後塵に謁し、

思想の惡化に墮

に及らずとも其の甚かからず。これ柳人自ら轉じて人亦之を轉じするものに非ざるか。茲に川柳雜誌社が川柳社會化の大旗を掲げて川柳の特種性を高調し來つて東都に呼號する其の意氣の熾なる其の時弊の匡救に劃切なる寔に敬服に堪へざる所なり

謹みて本句會の隆盛を祈り主幹同人其他關係各位の御健康を祝す

昭和六年十月十五日

正四位勳三等法學博士 和田一耶

麻生路郎選

橫濱 夫子

人を焼く煙餘りに空青し

（地） 大阪 水 車
搾取の窓に大空なかりけり

五客
釣竿の先の大空動くなり
嗽林子

熱球遠く大空をたじろがせ
大空がフト怖くなる晝遊び
満月へもいちご竹紙張り替へ
大空へ何不足なき手を擴げ

亂耽 咲兒 礼舟

銀翼へ國の威力を見る日なり
大空へ笑ひたくなるばかりなり
大空へ惱みを放つ聲となり
たよられる一人になつて仰ぐ空
まづしされる合せ鏡にうつる空
大空へ靜かな心置いてみる
晴れた空小金の出来た怖さなり
大空へ口のしまりを忘れてる
大空へ煙一筋靜かなり
大空へ素的な嘘を思ひ付き

栗坊 計變 兎耳 機見 紅坊 花川 劍五 昭肖 破鼓

とは云へど大空は答せて
青空がまだ續く食堂車
頂上へ來て大空に手を擴げ
飛行機で行けば大空逃げるなり
大空へ漆柿一つ残される
わきらめに似て大空にうなづかむ
空の色兒は飛行家になるときめ
まつずに大空向いて歩かうよ
大空の廣き下界の端た錢
大空の下で虚實が入亂れ
落下傘僚機は遙か雲に入り
大空へ淋しい時を頼るなり
裏街へ來て大空の美しさ
ステッキと寝轉ぶ芝生も眞似る
大空へ移住者日本語で唄ふ
大空へ秋の心をもてあまし

千濱 笑菊 鐵歩 紅石 民郎 柳次 紅食 没食 清月 佐保 桃太郎 庸好 默六 三笑子

雀みな空の蒼さへおちつかず
國境を遙かに護る献納機
興奮の身を大空に抱れたる
大空へ風船歸るやうに逃げ
大空は嘘の顔の向け所
廣重の瞳に大空を鶴の舞ひ

太耶丸 瑤天 紅壺 青東 芳聲 司馬亭

席題 青

竹を割る性で青年見込まれる
青年の意氣満洲へ行く靴
憂鬱を知る青年のにつた瞳
青年の容易く指の血を絞り
模擬戦へ青年一人傷を受け
青年に現狀維持のものたらず
軍服で來た兄みんなして圍み
村境青年團に用が出來
青年の眼へ文壇の華やかさ
火事場もう青年團で通さない
青年の希望を夫人なつかしみ
青年の希望は後で話される
トラックで今日行く所が青年團
應接間好い青年を連れて來る
青年の洒落は苦悶の捨てごころ
大地を蹴つて何も恐れない若さ
誤解されそうに青年夜を若さ
雄辯がそのまゝ戀になる若さ
自信あるだけに青年黙しきり

吟史 水車 正敏 琴莊 麻雀 耽陽 不道人 蝶太呂 春光 啞三味 雨吉 邑人 小かめ 司馬亭 萬よし 蕭舟 虎杖 山雨樓 新水

大空を聖人と云ふ氣で仰ぎ
大空へ制服いつか歌となり
名月の空に灯をけす百貨店
大空へ鼻血と別な思ひ事
金持の眞似大空へ氣恥し
同 佛 樂 莊 廣 愚 同
大空を聖人と云ふ氣で仰ぎ
大空へ制服いつか歌となり
名月の空に灯をけす百貨店
大空へ鼻血と別な思ひ事
金持の眞似大空へ氣恥し
同 佛 樂 莊 廣 愚 同
大空を聖人と云ふ氣で仰ぎ
大空へ制服いつか歌となり
名月の空に灯をけす百貨店
大空へ鼻血と別な思ひ事
金持の眞似大空へ氣恥し
同 佛 樂 莊 廣 愚 同

住田 亂耽選

若さみなスクラム組んでこの秋だ
雲のわく方へ青年胸を組み
秋の空青年團はすぐ喇叭
青年の夢へ擴がる世界地圖
朗かに夜を別れる金釧
大人がた背丈を笑ふ老教師
青年の潔癖未だ職が無教師
失戀で無い青年の涙ぐみ
歌なぞを讀む青年の涙ぐみ
云ひ切つてから青年の涙ぐみ
へんくつにされて青年灯に座り
彫刻の青年にある力癪(五卷)
青年の或日維新のことに觸れ
悄然と出る青年の背を惜しみ
青年の身のたくましく湯氣が立ち
たのもしい青年とあるバルコニー
石疊病む青年と摺れ違ひ人
かうかはれ乍ら青年餅をつき(形)かほる
決意動かす青年の眉宇(天蒼梧樓)
青年の拳動けばテロリズム(聯)亂耽

耽陽 太郎丸

土臺石汗と涙の一本氣 三笑子
基礎工事慘めに冬の陽へ動き 日出美

席題 礎

移民船礎になる旗をふり
礎の名も蒼錆びて破産する

寺井 紅太郎選

土臺石汗と涙の一本氣 三笑子
基礎工事慘めに冬の陽へ動き 日出美

礎を思ふ昔の紺暖簾夢裡
 十年も勤め會社の基礎を知り
 礎となる日に強い遺族席半翁
 礎式社長の礎の陽に光り花戀坊
 露の臺ばかりが茂る城の趾樂人
 基礎工事この酒場の朝鮮語(金聲)
 礎は地球の底へ脉を打ち鬼佛

席題
一人旅

青空へ淋しさ、湧く一人旅
 一人旅眠れぬまのペンと
 一人旅ヒヨリと女房を思ひ出し
 街の灯へぶらりつと一人旅
 あてもなく街へ別てみる一人旅
 一人旅同士又逢ふ峠茶屋
 一人旅峠茶屋から連れが出来
 茶を飲んでフト氣の換はる一人旅
 なりはひは靴になれし一人旅
 一人旅ふと氣が附けば腹が減り
 寝返りをして一人旅寝付かれず
 雨の夜の冷たさに寝る一人旅
 合宿の身につまきれる一人旅
 一人旅キチンと日記帳をつけ
 正確に時計合せて一人旅
 一人旅氣安く豫定變へてある
 旅へ出て一人の夜の長すぎる
 一人旅襟のよごれを淋しがり
 悪友へ書くことがある一人旅
 花夢樓
 佐保園
 半竹
 宵五
 若梧樓
 吟柳
 小次郎
 若梧樓
 薰舟
 米花
 映柳
 明兒
 凡樓
 花夢樓
 虎杖
 光好
 一吉
 八步
 不滯人

席題宮城

宮城を拜むうなじに風があり 井窓

二重橋母娘の心晴れて居る
宮城をたゞ拜みない故郷の母
團體の前で晴れてく二重橋
宮城の霞で感漱のひざまづき
宮城へ眞つ直ぐに來る團體旗
宮城へ校長の禮生徒徒
宮城の雨へ團體斜に濡れ
綠青のお屋根膝まで手が下り
宮城へ來て軍人になると定め
宮城を拜む旗持殘り
宮城はつきり母の眼に残り
宮城へ異人の御辭儀眞面目なり
馬場先に立つと宮城からの風
繪のやうにお馬が通る二重橋
宮城へ心かななる子のおじぎ
宮城の砂利へ外人喋舌り過ぎ
宮城の空氣土產にしたくなり
がラス拭き大内山へ首を下り
校長の聲改まる二重橋
寫眞屋も雨にわたる二重橋
宮城へ遠く飛行機晴渡り
二重橋帽子の底が陽に當り
宮城が近くの子も鼻をかみ(五客)
二重橋勿體なくも腹が空き
宮城へ猫脊になつた異人の眼
宮城へ母今生の杖を突き
まぢへ履物で行く二重橋
赤とんぼ一つ大内山へ消え
戦友はもう宮城の方を聞き
鶴が舞ひそうに宮城晴れ渡り(天)

空木
美津坊
小萩
捨陽
花夢樓
廊雀
山門
杜若
鯉水
太耶丸
映柳
鞍馬
黎明
宵五
駄坊
春光
花川洞
紅石
青蛾
天邪鬼
吟史
默六
三笑子
昭四
樂人
晚絃
呂平
吉
玉
瓢六

席題 金屏風

三浦太郎丸選

挨拶がごつちも巧い金屏風
有難い落口をいたく金屏風
金屏風別な人夫に運ばれる
白足袋の影も忙しい金屏風
金屏風丸一の顔酔つて見え
金屏風きちんとしたる膝ばかり
金屏風母ハシカチを出しそこれ
どの部屋もさわめいてある金屏風
洋装が頭からすぎる金屏風
金屏風女中の聲も改り
金屏風駄々ツ子外へ連れだされ（十考）
金屏風こは本家の座るとこ
いさゝかのとときめきを知る金屏風
子が觸れて軽く叱れる金屏風
金屏風運ぶ襪を主人あげ
爪を噛む癖を叱れる金屏風
金屏風部屋を覗いて子が叱れ
金屏風出入りがげしく灯が黙り
金屏風柵の外れた値を踏まれ
客の子が裏を見たがる金屏風

金屏風ほのかに晝の影もあり（五等）不
金屏風いよ／＼更けて静かなり
金屏風うなづくだけの女なり
東京も母の髪なりスアファルト
上京の父の髪を毛白くなり
久潤の友氷囊を替へて呉れ
内祝ひ母の襦も久し振り
就職へ妻の笑顔も久し振り
すぐ母のまつ毛が濡れる久し振り
久し振り肩苦ばかり殖えた友
久し振り候文の便り来る
火事見舞無沙汰も詫びてや来る
髷で来た姉さんへもう床が敷け
子の話酒保で持てる豫備と豫備
艶刺つて退院の日が待ちきれず
軍服で逢えは恩師は只見上げ（十考）
新道をおしへて送る久し振り
久し振り顔のきくの義やまれ

席題 久し振り

塚越迷亭選

素踊の緋がこぼれた金屏風
金屏風今宵きらめく星ばかり
一族の後に映かぬ花を活け（人）
金屏風育ての親のうしろつき（天）
素踊の緋がこぼれた金屏風
金屏風今宵きらめく星ばかり
一族の後に映かぬ花を活け（人）
金屏風育ての親のうしろつき（天）

影刺師電車通りへ久し振り
宵脱いで亦握手する久し振り
手に重いカッパグラスも久し振り
久し振り飲けなくなつた事を言ひ
落籍されて来て見る國の變り様
久し振りだてと球やで勝ち續け
珍客へやがて疲れる母の夜
仲見世でゆくりなく逢ふ戀敵（五等）
姦しく夫人同志も久しぶり
久し振り話し足りないまゝ別れ
久し振り今度は顔のきく所
久し振り首をしきりと縦にふり
久し振り袴を脱いで飲み直し（人）
久し振り二言三言他人めき（地）
眞心をこめて久しい國訛り（天）
久し振り染めて髪を笑ひひ合（柳）
影刺師電車通りへ久し振り
宵脱いで亦握手する久し振り
手に重いカッパグラスも久し振り
久し振り飲けなくなつた事を言ひ
落籍されて来て見る國の變り様
久し振りだてと球やで勝ち續け
珍客へやがて疲れる母の夜
仲見世でゆくりなく逢ふ戀敵（五等）
姦しく夫人同志も久しぶり
久し振り話し足りないまゝ別れ
久し振り今度は顔のきく所
久し振り首をしきりと縦にふり
久し振り袴を脱いで飲み直し（人）
久し振り二言三言他人めき（地）
眞心をこめて久しい國訛り（天）
久し振り染めて髪を笑ひひ合（柳）

御影長崎柳秀

東京富士野鞍馬

粒々集

騙される事程うぶに
飯くる勤の要をつて
辻占を眼鏡が要をつて
何處までも別れに
生澤な汗を拭いて
手内職の肩叩いて

女給みせ
げにし読みせ
の父の酒
親の決

あれがあの妻君だ
祇園へゆく金丹を割つて見られ
札幌の居見はくのが寝臺車に寝て
芝居の花とは別なはしやぎや
秋の旅花をキヤツといはせて
思つたよは別なはしやぎや
奈良の鹿舞妓をキヤツといはせて



川柳塔

路郎選

福田山雨樓

永田福太郎氏急逝

宴會の握手が永の別れとは

住田亂耽

蛭子省二氏へおくる

病む人のたより封きる夜の寒し

ひろしへ與ふ

おいと呼べばおうと答へる所に住み

鶴足へ與ふ

雲や水の話たくみに紺紺

目をかゝやかせてまあ上り給へ

東京にて

騎西屋の酔へ浅草時雨する

灰色の浅草午前十時頃

浅草の朝につまれたゆで玉子

東京川柳家達へ

時々江戸のうはさもきかまほし

飲んで寝たわが誕生のつまらなさ
元、藏の壁にもたれて植字する
嘘つく子父を暗さへ振り向かせ
出迎える兒がほんとうの姿見せ
相談で来れば女給の立つたまゝ
社の爲めに緑雨の財布古びける
校正の夜は世の中が違ふなり
植田六二兄渡滿

句集潮騒發刊

しほさるに眠れる愚陀と肩を組み

長男の怪我(二)

接骨醫殺風景な椅子があり

金棒へ猿の眞似とは大それた

東念寺とは玉兎朗居の號なり

期せずして小集となる 東念寺
先づ土が迎へてくれる旅戻り
多忙な人の横顔があをい 汽車

橋本 綠雨

ちつとみてゐると山はくづれくる
ペンの手で花瓣一つくれる也
うす暗い道を牡牛と歩く人
すみわたる山を農夫もみあげたり

中禪寺湖

歌の濱波打つぎはで洗ふ米

淺間溫泉

コスモスの中でアルプス曇つて居

銀ア ラ

銀ブラに落ちつきのない旅の人

雷 門

仲見世は買ひたいものがない處

吉田 水軍

つくろいのいらぬ顔の氣輕さよ

電飾は露の如くに灯るなり

どうせもう一現やると姉藝者

八子ちゃんへ

海越へて來たに二歳のギヤング振り

蓄音機當座近所をいやがらせ
秋の風兒童虐待防止法
連れ歩かれるだけの白粉
金入齒ある娘の方がよく笑ひ

關本 雅幽

藍の香の無きふるさとなりける
クシヤのセルで十圓貸せと來る
濟まないが今夜も酔ふて戻つたぞ
夜は夜でこゝろの飢えと戦いぬ
四十の秋を夜具の重さに寝るとせう
屋根の朝日よアパートの兒が育つ

朝田 新水

山の中にも眞夜中の驛
訊問のやうに病氣を聞かれてゐ
どうにでもなれと別れる時思ひ
ポーナスに女房の智慧のするどさよ
女房の腹立ち向ふむいて縫ふ

西田 艸樂

嬉しさの鯉の置き物に戸惑ふて

善良な無能者釋放されて來る

こめかみと腕の力が比例せず

○ 西村 明珠

出來る丈け廣く座つて晩の飯

若者よ養子の口を笑ふまい
支那そば屋右も左も門ばかり
無難作に慰めるのがうらめしい
こゝろやつてゐると月末恐ろしい
無口だと意識してゐる吾れに月
束縛のない雲が行く窓にゐる

次男病臥(五割)

敷蒲團乾してぶくぶく寝かせ様
いつまでもお前の靴はちびないね
宿題がきちんと出来て無駄だった
気分すぐれて博士の眞似など
級長の徽章返へしに母が行く

姫田夕鐘

あゝもしたいこうもしたいは死んでゐる
庭がないせめてはしゆんの花を生け
臆測をあやまれる友の淋しくて
明月は覗いて見ても丸いなり
自殺者を笑へる頭脳となつてゐる
車井戸二番なすびの水と知れ

判官切腹

薬師寺は肩で笑ふてかゝるなり
袈へ波をうたせて由良助

勘平住家

身賣するおかるは背なへよりかゝり

生田翠夢

奥様にしてもらをと云はないが
御近所へ煎薬匂ひまきちらし
待つ身にはなるなと落葉踏みじり
女てふ弱身を知つた惚れ方さ
嬉しさは袂に風をはらませて
曼珠法華秋の女の情熱か

日野華水

紙屑をつなぎ合はして居る事務所
伯母でない甥でないのへ月が照り
眞黒なカンカン帽で酒屋来る
人の心を考へて見る月夜
電車に注意、孫と手をつなぎ
泣く迄の女の口は尖つて居

中澤濁水

追ひ出した妻に會はれる未決囚
欄間師の鑿を左手に動かぬ眼
彼岸詣娘にゆづる柄となり
コスモスに世を諷刺する風のあり
死んだとは知らず附箋をうちかへし

晝の蚊がきて佛壇はいりゆく
水谷鮎美

社草とりかへるは陽にひかるなか
片戀のけむる煙草の火のこゝろ
信ぢきりたるなぎしの秋
秋の手紙に音がするなり

中島鐵洲

秋獨り情婦から電話かゝりさう
十疊に寝ても神經衰弱だ
父に似て一人は母に似て淋し
カフエーのマツチで済まぬお燈明
宵寝して獨りの秋をまぎらさん

奥野禿山

何う思案しても嘘より外になし
連れ添ふて笑ふて悔いて老けるのみ
かるか故に女嫌いと云ふたれど
間違つた意見を通す人に負け
明日へのエネルギーだと注がせてる

大西八歩

秋の空はつきりえがく山の線
海岸の九月は淋しく下駄の跡
實直も長しアルミの辨當箱
越味と云ふ姿兵兒帯長くたれ
起きぬけの窓が嬉しい瀬戸航路

石曾根民郎

こそくと秋を拾ひに出たか留守
膝を抱くほんに明日待つ姿やら
賣れつ妓の頬から時雨匂ふなり
自分に言ひ訊かせ過ぎて間に合はず

熊谷紅

資本家の意の儘にベルトが廻る
採用の垢を落さん朝の風呂
洋装で水道料を取りに来る
インフレーション矢張農民飢えんとす

龜井愚寵

平家物語

あはたゞしきなかに平家の人らあり
秋が來た歎異鈔など借りて讀む
きをみぬ日なりかなしさの湧く日なり
あるときは女に死のと言ひました

春元紀太

その時をたたんだまゝの金屏風
奈其にて

轉寢の枕三笠につづく芝
寂しさのためおしに来る奈良の鐘

赤い屋根を出る彼女は使用人
金のある方が女もいゝらしい

尼緑之助

屋根裏のラブ名月はほつとかれ

市場没食子

秋の蚊が疲れた辭書の上にゐる

女客茹莢豆へ手を延し

榮轉の記念湯殿が出來上り

喜多 春秋

親の眼にはつきり世帯やつれなり

女二人積る話の茶と茶菓子

前科者いやな笑顔にばかり會ひ

古い映畫古本を讀むやうに見る

岸上 錦石

親切に空巢へ腹を立てに行き

辨護士と山分けにする手切金

唾のみ込んで押さねばならぬ借川證

妹尾 變人

子を抱いてまだ満員電車なり

仕返へしをするに女の智恵を借り

食ふための車掌の聲は太かりき

竹内 機見女

あによめとおんなじ年へ甘へけり

浦島がもどつて來るに夕焼けて

河合 紫石

俄雨丁度ラヂオの軒へ立ち

結構な事に妾少しあき

仕方なく父へ從ふ内氣な娘

老人の足から冬を知りはじめ

宮岡 白峯

秋の風君も達者な便箋紙

掌を見つめて嫁に行く氣なり

渡邊 曉童

おくさんのひるねみられたあわてよう

言ひこめられたところへ猫が來てくれる

江戸みつる

酔つてからハツキリ知つた彼の戀

淋しさにまたお惣氣を言ひ出せり

村松 夢裡

言いきれぬ心よわさを見透かされ

サーピスの筈へ親切見てくれす

首藤 竹楓

釣り堀の上を旅客機らしい音

マダムの秘密を大理石は知るや

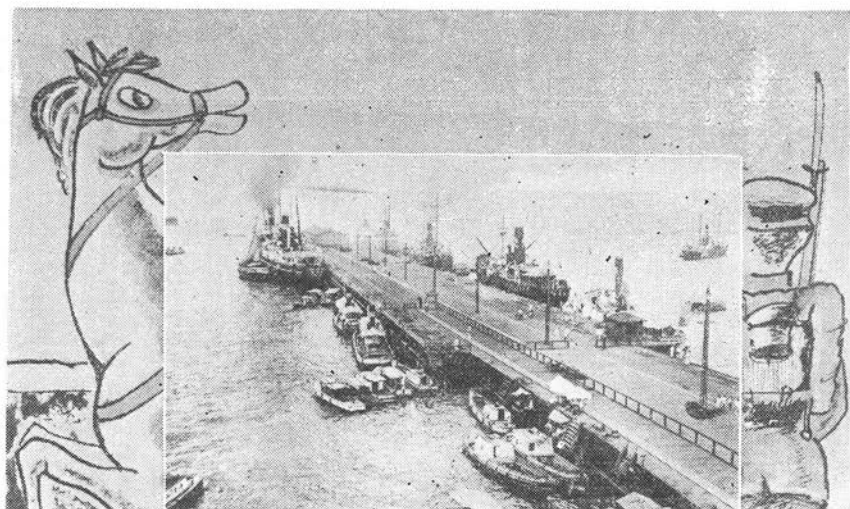
荒井 英賀夫

あんたかて缺點おますと差向ひ

惠ぐむ程ないに十圓落したり

廣江 天痴人

木犀の日向へ祖母と子等と雞



美鮎りたき動玉目の馬軍に港築

日本名所名物川柳

大阪の巻

麻生路郎選
大西長三郎書

日本の名所名物を川柳で暖かいたいと思ひ、その第一着手として手近な大阪の姿を約一ヶ年計畫を發表することにした(銘)

(五) 築港

大阪の好きも築港出てのこと	えいを
築港の朝遠近の灯が消へる	静波
築港のロン氏英語もちよつといけ	史康
豫防注射先づ築港がトツブきり	藤太郎
あこがれし瞳へうつる	一
築港へ微力も寄せた一と昔	禿山

けなげなる心破れて天保山 變人

銅羅汽笛等で築港更けてゆき 里十九

築港で見ればきたない帆前船 新水

築港で聴くサイレンはうごくなり 鶴足

築港は暗くうどん屋からのゆげ かほる

築港の風は便りを持つてこす 雀踊子

築港は女が派手に泣けるとこ 同

築港の記憶は二階附電車 春光

築港の圓タク強いことを云ひ 同

土佐行きが出て築港に灯がともし 三汀

天保山悲しい人もかへるなり 同

築港の朝霧にかけられしわな 機見女

築港でそれ／＼主家にひきとられ 同

築港の土へ置かれたバスケット 素月

x x x

日本名所物川柳は柳友諸君から多大の興味を以て歓迎せられてゐますので、前號で豫告しましたやうに、いつまでも大阪の巻發表ばかりで埋めないで、漸次各地の名所名物を紹介することにいたしました。先づ北陸の巻を募ることにいたしましたので、北陸の柳友は勿論、曾て遊ばれた北の國の句をまとめて應募されんことを切望します。

大阪の巻 — 麻生路郎選 —

岩おこし 三句 十二月三日締切

十日 戎、三句 一月三日締切

北陸の巻 — 安川久流美選 —

親不知 三句 十二月三日締切

兼六公園 三句 一月三日締切



武玉川初篇研究

(六)

梅 本 秋 の 屋
蛭 森 子 東 省 魚 二

(531) 袴着せて乳母の大口

秋の屋||お坊さんも袴着をなさるやうに、丈夫に御生長なされたから、直にお嫁さんを迎へるやう成るであらうなどと、家人に語るのであらう。

東 魚||自分の手柄で、袴着まで育上げたやうに、得意と坊ちやんの自慢を申立てるのであらう。

省 二||「髪置に乳母も強氣な鬘を出し」の如く、袴着に得々として、大口をさくとなる乳母氣質の純朴さがある。「大口も言ひてによつてきれいだ」(ム十七)

秋の屋||現代では七五三の祝と稱して、十一月十五日に袴着の式を舉るが、平安朝時代には、四月に此式をあげた事が「榮花物語」玉の村菊の巻に看えてゐる。

(532) 傘に寝鳥のさはく切通し

秋の屋||「切通し」は、開鑿した新道であるから、左右に樹木

が生茂つてゐて、偶々夜中に傘を差して通ると、寝鳥が騒ぐばかりか、狸奴が土砂を降らせる。

東 魚||傘にばら／＼と木の葉など、ふりかゝる氣分がする省 二||身がしめつぽくなり、しむみりとする。

(533) 勘當は蛙に水のかけ納め

省 二||蛙の面に水のかけ納めが勘當。親としてはこれ以上の方策もない。

秋の屋||此「蛙」は、化粧の水に溺れる奴である。東 魚||馬なら念佛の云ひ納めが。

(534) 腹のたつ時見るための海

省 二||眼を遮るものなき、水天髣髴たる大海を眺めて居れば、感情のいらだたさも自然に納まる。

秋の屋||雄大東海洋に面して、爽快の潮風にふかれると、心の塵も一掃される。

東 魚 Ⅱ こんな句は中々咏めるものでない。佳句だと思ふ。雄大な海に對して腹立ちを忘れ、あきらめた心持ちが、「見るための」と云つた處に、巧みに表現されてゐる。

(535) 螢から連に成る戀の闇

省 Ⅱ 闇は戀と螢に係つてゐる常套法。朝顔日記に、「一年宇治の螢狩に焦れ初めたる變人と、語らふ間さへ其の處の、短い契り本意ない別れ」

秋の屋 Ⅱ 「戀の闇」と闇まで言つたのは、少し言ひ過ぎて餘韻がない。

東 魚 Ⅱ 闇の字はチトいや味だ。あまり朝顔日記むき出しすぎる。

(536) 女にも心くと譽ところ

省 Ⅱ こういふ點の感情は、女の方に案外複雑だ。秋の屋 Ⅱ 姉さんは音羽屋が好き、妾は播磨屋が好き、祖母さんは故人になつた松助が大の御最負。

東 魚 Ⅱ 女はつつまじやかである爲に、人の説に逆はす共鳴したやうな事は云つてゐるが、内心はそれ／＼自分の好き／＼はあると云ふ穿ち味であらう。

(537) 淋しい宮に穴一の音

省 Ⅱ 穴を穿ち二三歩隔つた處から、錢や石を投げ穴に入られて少年が遊ぶ。淋しいお宮の境内などには適當して居る「松のなるべる下に穴市」(眉)一老も、道端でも子供はやつたもの古川柳に、「穴一の助言してゐる醫者の供」「穴一のそばで徳利が欠伸をし」。「酢をくんな御用穴一してゐるよ」などがあ

秋の屋 Ⅱ 私の幼年時代には、明地や路傍で穴一をしてゐるの

をみたが、多くは十六七歳以上の青年達で、細民の子弟許である。而て石よりも錢を使用し、勝つとそれを取つて行くのだ。

(538) 嵐の川に朝顔が咲く

省 Ⅱ 嵐吹く川邊に可憐な、朝顔がさいなまれつつ咲く。

秋の屋 Ⅱ 暴風の時に汎濫した川水に、朝顔の花が流れてくるので、川岸の風景とは思はれぬ。

東 魚 Ⅱ 風雨の凄じさの中に、清楚な朝顔を點出したところが手柄である。

主 壽 昌 之 部

(539) 派の利く手代面白くなし

秋の屋 Ⅱ 大商店に於て、主人も一目置く程の大番頭は、大名の國家老に等しく、忠實に倣り固まり、吉原の方角さへも知らぬのである。

東 魚 Ⅱ 若旦那などは第一に、面白くなく思ふのだらう。省 Ⅱ 大番頭はかくありたいものだ。

(540) 撞か見くるて伽な人相

秋の屋 Ⅱ 「伽」は誤字であらうが、諸何といふ字であらう歟。東 魚 Ⅱ 誤字ではなさそうである。外に武玉川の句「五十以上の伽を雪折」と云ふものもある。「二層の興になる」との意味合ひには違ひないと思ふが、「トギナ」とよむのか或は「興な」と讀むのか。

省 Ⅱ 私はトギだと思つてゐたが。

秋の屋 Ⅱ 「トヤ」でも「興」でも、よく決着しないやうである。

(541) 百姓は嵐にうその道が付き

省 二「光陰の二百十は敵役」ではあるが、百姓の嘘の言
譯には、この嵐が役をなしてくれる。

秋の屋 〓これを天佑といふ。

東 魚 〓年貢も多少は助らうし、米の値も上げられると云ふ
ものだ。

(542) 死だ家老にしからるゝゆめ

省 二 〓かかる夢でもみるやうなれば、先づ御家は安泰―古
川柳によると、家老とか妾とは火をすつたものだ。

秋の屋 〓甲府宰相綱重に對する、根津宇右衛門の俗説を、例
に引く可きである。

東 魚 〓夢のお蔭で夢がさめれば、結構千萬である。

(543) 目につく乳母へ舞て來獅子

省 二 〓「太神樂お乳母の尻を横にくひ」などと寸目につく乳
母への惡戯。

東 魚 〓「目につく」で乳母がデブプリした姿に、着飾つてあ
る様子が想像される。

秋の屋 〓昔の太神樂は、萬歳程ではないが、看客に對して隨
分ふざけたものである。

(541) 辛崎は商賣しみた雨が降

省 二 〓夜雨ときまつてしまふと、その降る雨は聊か商賣じ
みてくる。「商賣じみた辛崎の雨」(ム十八)

東 魚 〓夜の雨こそ眞價を發揮する。「商賣しみた」は利益と
よりも「玄人じみた」、「専門家らしい」の意味合が強いと思ふ。

秋の屋 〓所謂「匠氣」である。

(545) 文珠の智恵も三人の分

東 魚 〓三人寄れば文珠の智恵だ。さすれば文珠様と申して
も、三人前位なのだと思ふ。

秋の屋 〓文珠菩薩の智恵と、凡夫三人の智恵と、天秤に懸け
て輕重無しとは、お釋迦様でも氣がつくまい。

省 二 〓「文珠の智恵もとりあつめもの」(ム八)、結局自分等
三人以上には出まいヨ。「どうせ三人よれど、ない時は、文珠
の智恵も徒らに顔を見合すばかり」(聖德太子繪傳記)

(645) 衣て禮に歩行蜜夫

東 魚 〓蜜夫はママトコと讀むのだらう。ミソカワではちつ
ときどき過ぎる様だ。近所なり町内の扱ひで命丈け助けられた
姦夫が、頭を丸め衣を着せられて、これから追放の旅に出る、
其命拾の禮をして歩くのであらう。

秋の屋 〓姦通の贖罪として、髪を剃らせる事は有つたが、僧
侶とする事は無かつたやうである。これは全く想像的の句であ
ると思ふ。

省 二 〓類詠があつたと記憶する、探さむ。

(547) 親指に折らるる人は手から也

省 二 〓第一指に屈せられるのだから。

東 魚 〓外國だと小指が第一になる。(女尊男卑の現はれか
呵々)

秋の屋 〓「巨臂」といふ成語は、第一に指を屈するより起つた
ものであらう。

(548) 死た手際を譽る棒突

省 二 〓自殺でも手際よく美事に死むだ方がよい。尤も「立

派に死むで恥のうはぬり」(ケ二二)などとはある。

東 魚「あとに醜態を成るべく残さぬやう、出来るだけの注意をして自殺したのだらう」(女なら膝をきちつと紐で締めて置くといふ様に)

秋の屋「如何なる場所である歟。それは不明であるが、大方路傍の變死人であると思ふ。

(549) 念者と人の知るを待かね

東 魚「藩中有名な美少年を、くどき落した嬉しさに、噂の立たぬうちに、目にあまる念者ぶりを見せ付けるのであらう。

秋の屋「俺はあの娘と念頃になつたなどと、兎角に自慢をしたがる奴さ。

省 二「一方、秘密にしたがるかと思ふと、他方、評判して貰ひたかつたりす、人の情は面白いのだ。

(550) 二百十日の屋根に浪人

東 魚「居候嵐の屋根を這廻り」より、尙衰れに、自分の家の雨もりに、浪人が急應手當をしてゐる場合。

秋の屋「屋根に浪人」で、厄人の暴風雨を想像させるのは、實に巧妙といふ可きである。

省 二「浪人でも雨漏りには、辛抱出来ぬ。

(551) そろく見へる後家のからくり

省 二「あぢきある世の中で後家面白し。からくりがみへかけては、噂の種となる。

東 魚「からくり」は方策位の意か。寺詣にかこつけて、何處かへ行く一段々あやしい事になる。

秋の屋「此「からくり」は、色よりも慾の方ではない歟。後家といふと、直に色の方を聯想するが、多くの中には、亡夫の遺

産に着目するのあらう。

(552) 折々損をするも養生

省 二「大酒をしては胃腸を損じ、醫師から絶對養生など申渡される。―これを繰返すのだから、女房には頭が上らぬ。

東 魚「苦笑せざるを得ない。メートルを上げた翌日は、財布は軽いが頭は重い。當分の謹慎も養生になる。

秋の屋「此損」は、損益の損ではなくして、内損であらう。昔は胃腸病内損と呼びたのである。

(553) 大つゝみとは公家の荒事

東 魚「笏より重いものは持たないや公家様には、太鼓は全く荒事であらう。

秋の屋「鎌倉時代に鼓の判官と渾名された、豊岐知康といふ公家が、一大事を惹起したことが「源平盛衰記」巻第三十四に有るから、其故事を詠むだ句ともいへる。

省 二「二説に盡く。

(554) 我が田を取られた川で渡し守

東 魚「おのか田をと讀せるつもりかもしれぬ。(私の所藏本には「レ」が捨てあるが、前所有者の加筆らしくもある)。

洪水の後、田はあとかたも無く流され、然かも其處へ川筋が變つてしまつたのだ。止むなく敵と思ふ川の渡守に落ぶれてしまつた。感慨無量であらう。

秋の屋「我が」は「われが」と讀むのであるが、洪水の後の田が川に變じたのではなく、廣大の田圃の中を、小川が貫流するのであると思ふ。

省 二「二説いづれにも解せられ、洪水後川筋の移つた事も實際にある。私のみた原本には「レ」の捨てなし。

東 魚「嘗て小田原在の知人の田が、酒匂川の氾濫のため流されて、川筋に變つた實例を知つてゐるので、前述の如く申したのであるが、秋の屋翁のような場合も勿論あり得る。



是空庵より

長野吉高

本誌九、十月號に連載されし麻生氏の「五七五の翻譯」の一文は、曾つて無き好文字として甚だしく吾人の胸を打つものあり。これ病苦を忍びてこゝに筆を執る所以。

翻譯とはそも何を言ふ。吾人、またいさゝかこの事に關係あり。雑誌の性質上本誌でこゝろしく云々するは遠慮すべきも、遠慮却つて遠慮にあたらず。もつて左に一言す。

翻譯の如何なるものやは、凡そ其の道にある者、最もよくこれを知る。絶對正確なる翻譯の不可能なるは勿論なり。さはさりながらこゝにまた、一步退つて熟考の餘地あるべくこの嚙み分け、誤つては人の笑ひを招くに至る。

蓋し九月號「改造」誌上に於ける杉村

氏の翻譯に對する嘆聲は、これ譯醜良心としては何人も當然一度は吐くべきものたゞ餘つて言に過ぎ、こといさゝか穩當ならず。定規式概念の遊戲的理論はどうあらうと、實際には思ふてまゝならぬことこゝに悲哀あり。このあきらめに大悟あり。

自國語にて文を綴るも、萬端誤解釋されて人に傳へらるゝ世の中。同文時に同文を知らず。この不都合は異國のものを誤譯するに劣ることあらざる莫きか。楚人冠氏もつて如何となす。言ふも不可言はざるも亦不可。たゞ翻譯のこと問題にして問題とせざるが可か。

そぢやが、ことのついでに、こゝに翻譯の實證をかく。味噌の味噌臭きは眞の味噌ならねど、手前自慢のミソに過ぎ

東京・遊・走・記 宴果てて

竹内機見女

宴果て、秋雨けむる隅田川を窓外に眺め乍ら、私共一行が田端のホテルへ着いたのは午前一時頃である。

化粧室が私の部屋にあてられた。帯を脱いだ私の口からは、多分黄色な疲れた息が洩れてゐたと思ふ。

併し今日の大会のあの感激が、それからそれへと、一人はつちの部屋の空氣をそめて去來する。一行の樂しげな爆笑が、夜半の廊下を傳ふて、まっしぐらに私の部屋にくる。稚兒にも似たあの笑聲こそ、今日の此の意義ある句會を無事に終つた同人社友の心からなる喜びなのだ。それにつけても腹乃先生が居られたら——と、まだ満ち足りぬ心をさうする事も出来なかつた。

本降りとなつた雨の足を聞いてゐると瞭にあつたのを感じた。

感激のか、將又旅愁のか！

一九三三・一〇・二〇

わても出たかつた

高橋かほる

「アー踊りおごるならチヨイト東京音頭……」農大へ行つてゐる親類の息が、學校の運動會に東京音頭に出るので招待されて見に行く。と櫓の上には、唄ひ手は學生だが三味線を弾いてゐるのは粹な人だつた。揃へてのゆかたへ農大を表現した。ですらりと踊り手が並んだ時

譯さるゝところなり。學界文界の爲め快事と言ふべし。分けて宮原氏は當代無雙の碩學、さりながら其の深遠なる學殖を以てするも、猶幾多の翻譯不能なる語句あるを嘆ぜらる。

これより前、大正三年頃、同氏に「西廂歌劇」の付印あり。こは、臺詞ト書を省略して地の文となし「曲」のみを我が七五、五七、四四、四六、六七、四八調などの句法に譯せるものなり。散文より詩類の譯の困難なるは何人も認むるところ、我が俳句川柳の異邦譯の至難なる如く「曲」の翻譯また極めて困難なり。

吾人、また曾つて「西廂記」を譯し、ラムの「シエクスピア物語」に似せて「西廂記物語」を書く。「琵琶記」はその一部の鈔譯を原作の體製とせず、我が戯曲の體製に改變して劇壇に紹介せり。西廂記の如き、その譯出にあたりて幾多の疑問あり。例へば「不沙」なる語の如し。こは「……さうでないならば云々」の意味にとるより方法なし、支那、焦循の「劇說」によれば「不沙は不是(ブシ)の轉音とあり。按するに、不是阿(ブシア)が

轉用されて不沙(ブシャ)となりしとも解さる。或は、既に不に不是の意ありて、沙の字は「呵」などと同じき助字とも見らる。これ不沙の語には反語の來るを以てなり。

凡そ翻譯は、原文に捉はれ過ぎて不可なるべく、離れ過ぎて不可なるべく、この點甚だ微妙なり。支那戯曲など、分けて文字に拘り過ぎて字義通り譯すれば馬鹿々々しき誤りを招くべく、字面外の意に注目の要あり。字義を以て解せず、意情を以て解すること鐵則なれども、さりとて其れのみにては不可なる時あり。こゝらに四十八手の表裏の使ひ分けあり

翻譯は、如何なる人の筆になるも、猶あれこれと誤譯迷譯あるは否めず。さりながら、この單純なる理由をして、翻譯そのものを呪ふこと愚の至りなり。誤り譯せらるゝよりは寧ろ譯の無きを望む、と言ふ者あれど、世にこれ程わけのわからぬ屁理窟は無し。その理由、よろしく寝て考ふべし。

他人翻譯に就き、とる氣になりてアゲ足をとれば限り無し。誤譯は相見互ひそ

はわても出たかつた銀座の三越の家具部、ナメヤエライ人やさかいに覗くと斷髮のベッピン、のマネキンが長椅子の上で横になつたり膝ひたり上向きに長く足を延ばしてラクマクラの宣傳。歌舞伎座を見ると定式幕の色の順が違つてゐるのは氣になつたが玄治店で興三郎と蝠蝠安との引込み、花道にせず舞臺を一度廻はしてくれたのは嬉しかつた。勝手が解らないから歌舞伎座を出るとすぐに銀座の松屋の傍の宿に泊るとジャズに交る新内流しの三味の音。アーエナせつかく東京へ來たからには銀座の氣分を味ふたると思ふと急に火の消へた様な静けさへ夜廻りの打つヒョウシの音。銀座のはなやかさは十二時限りとの事これじやしうがねへ翌朝みやげにタオルかと思つたら粹な日本手拭これは洒落てる。

中禪寺より

橋本 綠 雨

東京句會の翌十六日銀座の松屋で水車君と別れ、雨の東京を東武電車終點へ圓タクを飛ばし、中禪寺行の客となつた着いたのは夜八時。出迎えてくれた米屋旅館の客引は最近陸相や松岡全權の宿つた事やホテルに次ぐ見晴しや設備のよいことを自慢して居た。湯にひたつて疲れた身を流して貰ひながらちつと考へると、なんだが一行にすまない様な氣もした。川柳雜誌社に多少の餘裕があつたらしく、皆んなと慰安會を催したならなご思つた。

湖は海抜四千二百尺のところにあつて、あか／＼とした炭火が火鉢にみたされてある部屋で銚子をかたむけて居たが、背がひんや

ミソ臭しと思はるれば、勝手に鼻をつま
ゝれたし。

○

さんぬる年、支那文藝雜誌「小説月報」
に我が芭蕉の句の「ぬれて行く人もをかし
や萩の雨」を譯して「行人爛漫雨中萩」
となす。惜しむらくはこの支那文人を逸
す・五七五調の七言への移植、まづご苦
勞と言ふべし。さる男、爛漫にをかしや
の意ありや無しやと探求す。詳しくは考
ふべし。

○

支那元時代に戯曲あり。これ元曲なり
その体製は世界無比にして、台詞の他に
「曲」なるものあり。こは普通に我國な
どに傳はる詩と異りて、平水韻の百六種
を用ゐず 元代に周德清の戯曲の爲めに
示せる「中原音韻」の十九部韻なるもの
を用ゆ。故に、詩とは根本的に差異あり
即ち、その文字の長短一定せず、然も自
ら一の律音あり、長短一定せざる中に韻
字と呼びて我が和歌、川柳などに言ふ字
餘りの話あり。加へて、當時の方言、俗
語、洒落などあり。文辭語法の破格なる
ものあり。故に、我國普通に行はるゝ「
漢文」とは同視混同すべからず。漢文讀

法を以てしては到底その讀解不可能なり
これ、單なる所謂漢學者にては、戯曲の
讀解の出來ざる所以なり。我國に於ては
現在にてもこれの専門研究家と目するもの
僅かに十指に足るや足らずの一部學究あ
るのみ。その研究の困難なる門外の者の
想像以上なるものあり。

○

北曲に「西廂記」あり、南曲に「琵琶
記」あり。世界文藝史上に名高し。「西
廂記」の如きは、シエクスピア無く、モ
リエール出でず、歐洲劇壇いまだ起たず
我國に於ては戯曲の體製すら完全に無き
約六半世紀以前の作なり。文字の幽艶豪
華なる古今に絶す。こゝに吾人の驚嘆す
るは、既に今より約一世紀前フランスに
於ける支那學者ジュリアンにこの「西廂
記」の佛文譯あり。同じくバサンに「琵琶
記」の譯あり。この他、この兩者の支
那戯曲を佛譯するもの二十有餘種を下ら
す。その譯出に容易ならざる苦心、洵に
察するに餘りあり。

○

我國にては、大正十年始めて「西廂記」
「琵琶記」の全譯出づ。これ、日本學界
の一大痛恨事として、宮原氏、鹽谷氏の

りとして来る。繪葉書をとり寄せて寢室の方
で三十枚ばかり旅信をした。む。
東のしらむ頃首をあげると 靜かな湖と一
面に紅葉し男体山が實に美しかった。自分は
いつまでもあかすにそれを眺めつゝあ
た。

印象 二つ

住田 亂 耽

わざ／＼東京まで行つて、多くの時間を疲
勞の爲にれてゐた私——「マルセーユまで小
便をしに出かけ 柴舟」といふ句の主人
公のやうな東京での日を送つた私には、晝は
あやしげな紛装をしたおひろめ屋の樂隊と
夜はあくごいネガンサインの灯しか、頭に殘
らなかつた。もう一つ、路が非常によくなつ
てゐる事は、旅に來たものにとつてカムフラ
タアブルな氣持であつた。

抜け詣り

庄 萬 よ し

十五日の前十時に向島から京成電車で成
田行きに乗つた。電車の故障で二十分も後れ
て面喰ふたが、成田不動にこの秋の紋目を目
かける善男善女の頬被り、姉さん被り等々には
私の生れた 中國の山中の縁日そつくりで
嬉しかった。

銀アラ人種は 參詣人の十分の一にも足り
なかつたらう。

れを抜打的にアゲ足とるはいさゝかものゝあはれを知らざる心なきやりかたとは思へど、例へば「唐人お吉」を英譯せるダレン・ショウ氏は、原作に伊佐と言へる者、それとなくお吉に、支那の王嬌の悲話故事を引きて聞かせる中の「王嬌」を單に「コウト、レディ」となす。そも王嬌とは王昭君なること人の知るところ前漢の元帝の宮女なり。お吉にとりては重大決意ともなる動機この悲話のヒロインたる王嬌を、單に漠然たる「コウトレディ」とのみ譯するは妥當ならず。また原作に「……ばく水を渡り云々」とあり。ショウ氏は、このばく水をそのまゝ譯して「ブラツク、ウオーターズ」となす。ばく水とは即ち墨水にして、こは支那の黒龍江を指すなり。黒を墨と呼びし原作者の意はショウ氏に通ぜざりしと見ゆ。また近く「源氏物語」を英譯せるアーサー・ウェリー氏の支那詩の譯として麻生氏が原譯のまゝ本誌に重記するゝものによれば、ウェリー氏は「簫鼓」の語の中の簫を「フリュート」と譯せるが如し。假りにウェリー氏に一步譲りて、萬やむを得ざる譯となすとするも、これにてはまだゝ妥當なる譯とは言はれず。

或はまた、アストンの「日本文學史」を見るに、我が隨筆のことを「ショウト・エツセイ」と譯せり。この譯語に不満をもつ者たゞに吾人のみにあらず、さらにまた、ドイツに於ける支那學者ガベレンツ教授の著に「漢文經緯」とも名づくべきものあり。その研究驚くべきものあれどこのガベレンツ教授をもつてしても猶ドイツ譯によるものにては正當を缺きたる點あり。

○

要するに、翻譯の不可能論はこゝらにあれど、繰返すごとくさりとて翻譯そのことを一概に排撃すること不當なり。譯出上の意見研究論議はよろしくあるべきも、徒に翻譯の不可能論をふりかざして終に何等の歸すことを知らざるは、一を知つて其の裏を知らず、いまだ翻譯の何たるかを真に知らざる者なり。近來、もろゝの雜誌に今更の如く翻譯論の汜濫せるを見る。翻譯の眞理は寧ろ平凡にしても常に不變なり。時に愚論あれば奇も好む輩をしてことを誤解せしむる憂ひあり。心すべし。問題にして問題とせざる、不可能にして可能なる、この境地に翻譯の玄妙あるを知るべし。

掛茶屋で傘借りて行く女連れ
宗吾神社の 甚兵衛渡しのパノラマには二
十年も若返つた程おまつるい。
繪にもなり一揆にもなる印幡沿

東京 一瞥

朝田新水

小さな都市の全人口程の人間を吸ふ、丸ビ
ルも今日は日曜で靜かな朝だつた。各自が自
由なコースを取るこゝになつたので、思ふが
まゝに歩いて見る。此處だけは高級といふ日
比谷公園さすがに鶴の嘴より吹く水さへ氣
取つてゐる。近代建築は威風堂々、モダンな
橋、急勾配の阪も立派な道となつてゐる。銀
座の舗装路もフラ／＼とろろつき、デパート
には七五三の衣裳陳列も輝いて目につく。映
畫の殿堂淺草六區の活動小屋が並ぶこと皆
満員の札を掲げてゐる。灯の暗い宿場の空氣
はどこへやら、新宿の賑やかさに驚く。會
場並木俱樂部に定刻以前より、東都の川柳家
の顔が見えて居たのも嬉しく、受附係を仰せ
つかつてその多忙には作句も出來ず、その盛
會だつた事は、私がこゝに筆を運ぶまでもな
い。

その翌日手草川柳會があることを聞かされ
出席各題、句箋の色分け、三光、五客、十
客に呈賞される事にはいさゝか面喰らふ。た
つた二日の在京を有益に愉快に過ごし中央
線のスピードアップを利用して、新宿を去る

月評 鼎座の中から

丹路・鮎美・山雨樓

近作柳樽より

兩手出し受けるつらさを君知るや

杏 三

山雨樓——杏三兄が巻頭に表されて嬉しい。非常に嬉しい。君の句からは君の聲帯と脈膊とが常に感じられる。この句にしても君の鬱ぼつとした心意氣がまともに打出されてゐる。そして君の純な生一本な氣性が白日の下で大手をひろげてゐる。胸に響く句だ。

丹路——全く同感です。後輩の私が望みたいのは、之からもつと——飛躍してゐたいことです。そして明日の川柳を私達に示して欲しい事です。この句がもつ内容技巧が昨日のものであると云ふのでは決してありませんが、以前に「道化師の頬に宿りしお正

月」の句ひごく參つて居りますので……

鮎美——この句に接して、膝つきあひて君と談したい。頬を涙のつたふとき人心のおく、その知らるおもひの……。さめてはゐるが、お茶一つ、粗菓のひとつまして、手を握りあつて握りあひて時の過ぎるを知らぬ心ぞ。本當のことを言ふのに匙を置き

三 汀

山雨樓——素直にすらりと叙してあるが觀點は確かだ。人間の本来の姿を見付けてそれに引込まれるやうな親しみと落着きとを覺えたものであらう。穿ち味もかなりあるが僕は寫る素直さに心をひかれた。

丹路——同感、こんな句を讀むと小生なぞもう一度出直して眞實な「穿ち」を体得して

武蔵野の句ひが、抜けきらない乗客の、田畑の枯死にその悲壯さを物語れるも、涙ぐましく汽車は此の時笹子のトンネルにさしかゝつてた。

握手 手

吉田 水車

私としては詩を通じての握手はあつても實際膝を交へての騷談は今回初めてでありしかも東都柳友諸氏の熱誠な御清援には涙なきあたはぬところであつた。

下町娘

石曾根 民郎

ごこを押さへたら粹な味が響くのかとあやぶまれる私が、旅と無理に名付くる東京で淺はかにも下町風の娘の後をそつとつけてみたのだが、いつそ氣安さのうちに行はれた可愛い惡戯として許されてよいものだと自分に云ひ訊かせた。氣持ちから申せばすがすがしい青空で、薄のいくすぢかがなびいてある靜かな秋の野原に、彼女へつなぐ赤蜻蛉がふたつ、みつ、よつ流れてゐればよかつたのであるが。

地下鐵にどこかない太陽を、固い頭の上に感じて瞬間見上げた、迂濶にも口をあいてゐた顔が向ふの硝子戸に光つた。足早やに地

来るべきだと思ふ。

鮎美——よき父の姿とも見られる。靜まれば心の匙ではある。

こゝろに豚のごとく女せまりぬ

噴 兒

鮎美——好い句ですれ。聖なる夢の、との自己の過去を……靜かにベットによりておもふとき、嗤へる人生の女來りて、すでにそこにまゝに闇の女の(絶對に職業的でない)住みて、解脱せむとすれども今ははかなく、ふたゝびベットになほ今も悶ゆるころの、女を視つむる句主の現實ともみられるまごゝろの弱々しさがよいと思ひます。

丹路——此の句よく分らないんですが、愚陀の「ものうきまでに女あまへる」に幾分急迫感を加へた境地ぢやないんでせうか。

山雨樓——それは違ふと思ふ、愚陀のは客觀と主觀の融合した具象化であり、提出句は主觀一點張りの叙情感であると思ふ、愛慾と情痴とのこんとんとした異性禍に對して、心が洗ひ切れない、悶えを告白したまでのものだ。夢を戀してゐる氣分も窺はれる。「豚のごとく」は盲目的な重くるしさと、煩はしさの氣分を表はす言葉としてふさはしい。

いゝからだ顔は見ないでおきませう

貧 兒

鮎美——これはまた表面女性觀、裏面男性觀でせうね。スピード時代の去つた現代スポーツ時代にびつたりときてゐる表現でもあり、明期三三型ウーマンのものつ潜在意識とも見られませう。パンクロフトは去つてシェーパリエ型とも見らるゝ實力性に富む現代人の核心にふれるものです。轉向の女性心理をうまくつかむだ 中七はことにいゝ表現ですね。

山雨樓——實以て僕等も、街の彼女等の後姿に斯うした情痴を感じるのです。しかし斯うまですばりとものが言はれないのです。憶病と云ふのではないが、感じ方の不純と雜漠とが平凡と稀薄に導いてしまふのです。詩への突進にはあくまで、魂の醇化と燃焼とを要することを教へられる。

丹路——貧兒氏の見ないでおいだ顔が、どんな顔が見たい。近代美學と云ふものであつたら、このいゝからだの上に乘つた顔はいとうるはしき顔であつたかも知れない。餘談昇給は嬉しう規約金を出し

利 生

丹路——あはい哀愁を、この句に感じるのは僕のセンチメンタリズムのなす業か、味

上に出て來て、太陽をもう一度口をあいて仰がうとしたがやめてしまつた。あんなところに畫同住む人間よと横目でちよいと笑つてやつたけれど、いかにしても倦き足らぬ嘲りであるらしいから、こちらが潔く思ひ上つたとしておいて、雨に見舞はれた翌日、雨がとどかない地下歩道をあちこちと横斷してやつた。

なまじつが淺草をなめる氣概はないが、シタ戀しい田舎臭きに泌みてくる味だけはわかりそうだ。その畫、堂々袴を着して活動街をよるめき歩いた人間は、ひいき目に見て私ひとりきりだつた。きちんと身だしなみがついてよいにはよいが、可成しかつめらしくてはづかしかつたので、いそゝとかくれるようにエノケンの椅子に腰かけて、ひとまづ落着いて見せた自分だ。

曲りくねつた界隈の、軒をつられて兩側にひとつ／＼の白粉つ氣が嬌聲を投げやるこゝ××だけの夜のさざめきは、浮かれ得ない自分すら、變な氣分にひたりがちであつた。體裁のよいしこなしを見せつけても、この道だけは格別なものだと、誰にあてつけるでもなく云ひ放した自嘲であつた。

すべてOK

村 松 夢 裡

入京の第一歩東都の重鎮川上三太郎氏、武田玄六氏や思ひがけない、高木習々氏なぞに

給の嬉しき、併し一度裏返せばサラリーマンの悲哀が顔をのぞかせてゐる。サラリーマンのもつ小市民性は、幾ら力んでプロレタリア意識を體得しやうとしても無駄だ、眞正のブロ川柳は私達の手からは生れないであらう。私達は正直にサラリーマンの嘆きを嘆いて居ればいゝのであらう。そこにひよつとした救はれる道があるかも知れない。

山雨樓——事その事は猥雑なるサラリーマンの喫煙風景だと思はれるが、そこに悲哀とも哀愁とも付かぬ安易感が流れてゐる。ある種の諦観から生れた人間性の側面觀でもある。罪のないと云つたやうな、平和な見方も窺はれる。所詮小市民性の序幕的演奏に外ならぬ。何としても匂が甘い。

鮎美——ゴーストツプの都會癡のアスプアルトを歩む自己を視つめる時、一抹の哀愁はあるが健實な歩一歩は昇給に喜び、良父善夫となりて將來を約し現在を固めて、幸福のうちに規約金を出してゐる。一元二次方程式な健實さがある。サラリーマンシツプですれめじかごがかせにゆれてるさみしさだ

曉 童

山雨樓——めじかごひもじさめしかごではある。實に人間の情操にみちた詩感では

ないか。ものゝあはれを人間と云ふ描り籠に入れてゆきさるやうなゆとりがある。下五を「さみしさだ」と強調したのは稍難色を認めるが、生じつか「さみしさよ」なんて感傷めいては匂が浮はつてしまふ。

丹路——めじかごがかせに搖れてる風景は確にさびしい。「めじかごがかせにゆれてる」だけで十分句主の感懷はうけとれる。何とかなりさうな句。「さみしさだ」が結局閑として残る。

鮎美——眼にうかんでくるはひからびた人生、この人生觀が實感であれば異議のないのは勿論ですが、おそらくは「さみしさだ」で客觀とみる。——句全體のひらかなが、いですれ——。

川柳塔より

ビフテキの味覺家園を思ひ

亂 耽

山雨樓——此處にも亂耽君の鋭角な感覺を見出し得る。フ、ンとおさまつてこの匂を味ふと腹の底からユーモア感が浮び上つて来るが、生まやさい川柳技巧でものし得る句境ではない。身體全體で得た川柳的シヨツクである。盛り上つた實感である。

鮎美——山雨樓氏に同感、下の「拳闘家を思ひ」が殊に佳いです。野性ほとんど獸性

迎へられたのは何より嬉しかつた。自分は夜行の疲勞で兄の家へ納まり、一と風呂浴びて少しく眠つたが、なか／＼元氣がとりもどせない。

ふら／＼で兎に角仕事に掛つた。所用後午後三時半ギリ／＼に會場へ駆付けた、既に縁雨氏などで大體の準備も終へた處で間も無く定刻五時三十分そろ／＼東都の柳人の入場あり、六時、七時、七時半には柳人が會場を埋めつくした。仕事もOK 大會もOK。

東京斷章

生 田 翠 夢

東京の柳人諸氏には、未だに江戸ツチの氣風が、多分に殘されてゐるのをはつきりと、知つた事は嬉しい事の、最も大なるものであつた。

殊に自分を引廻して、大東京の横顔を多忙中にも不抱、まる二日に涉つて晝夜、付添つてゐた、きやり吟社の茶六、花川洞、玄六、琴莊の諸氏の御厚情には、すつかりと感激してゐるのです。

玉朗居で再び御逢ひした雀郎、迷亭、夢一佛の諸氏にも、充分にその氣風が何はれて亦懐しい思ひ出の一つとなつてゐます。

杜若氏の開催の句會平草會に、出席しましたが、大阪と違つた句會の空氣に、一寸變つた印象をうけて歸へりました。

カフェーには意外に、關西語、殊に大阪辯

とも見らるゝ？拳闘家の良心を（堅實に）んげん拳闘家）つかんでゐて、永遠の紳士的態度がよくうかゞへます。

丹路——私の感覺内至感情は、至つて古典的で日本的でありますので、この句がひびくエキゾチックに響き魅せられるのです。好きな句の一つ。

キツテリと足袋をたゝむて女氣の

水車

丹路——九句のうちこの句を頂きます。下七の「女氣の」と流して在來の川柳味——穿ちの臭味から抜けてゐる點、いゝと思ふんですが如何ですか。

鮎美——そうですね。「女氣の」はやはらかく感ぜられますね、このごろの水車氏の句にはいゝ句があります。「元日の足袋は着物のうへにのり」がほるさんの句とおなじく極く自然な優しみのある句です。ますく——中堅水車氏の健吟を祈る。

山雨樓——僕は「金溜めるやうではいかめ」と言はれ「方」とる。この方により多くの人生滋味を覺えるから。提出句は寧ろ古いと思ふ。叙法はなるほど臭味を脱して所謂灰汁がぬけてゐるが、それだけに平明すぎる松窓氏の「足袋をはくときにみだらな二十四五」ほどの魅力（句が持つ）がない。軽く迂りしてはゐないかと思ふ。

魚籠の中へ電車賃だけ入れる 緑雨

丹路——身邊雜事報告と云へば云へないこともないが——さう云つてしまへない愛着を可成りはげしく感じます。僕がこの句に愛着を覺えるのは逆行でせうか。

山雨樓——それは人間の誰れにもある素朴への愛着であらう。偽りのない虚飾のない凡人凡情にも限りなき愛着は宿るのだ。おまけに二の句の叙法そのものが素朴である。つまり素材と形式とが、偶然的融合を遂げてゐるんだ。

鮎美——同感です。

既に——督促狀が刷つてあり 鐵州

鮎美——人生の斯くあるを感じぬれども現實の臭味はぬけきらぬ嫌ひのある吾ら、非凡の才あれど愚鈍の輩なれどすでに——督促狀が刷つてあるのである。にんげん若しこれに叛むかんか遅し、氷刀いたりてころりおちるもの果敢し。墨いろ判斷姓名判斷等々、臭味ある人生既に——遅いかなである。

山雨樓——人間の暗黒いかなを見透かした句であらう。ちよこさな遣り方なのである。人が喰へないのである。だが、それが可愛いのである。面白いのである。句の叙法が巧みに其間の雰圍氣を表はして餘うない。丹路——二氏の言葉で盡きてゐる。何をか云はんやである。

が進出してゐましたが、何んとなく場にそぐはない感じがして、こちらが一すてれて仕舞ひました。

歸途津路夕方通るとき、暮れゆく空に大不二がはつきりと、全貌を見せてあの雄大なあの莊嚴な姿は、自分をして一時間下車さしました。

こんな嬉しい目に遇ふた

平井春光

直木式に云へば……

まだ面識もない筈の僕の席へ、出發早々萬よしさんが盃をさしに來て下さるし

宿のきまらぬ僕へ緑雨さんが一語に泊らうと誘つた上に水車さん機見女さんと同車で東京見物をさして下さるし

句會席上では山雨樓さんがオートジャネイロのやうに縱横無盡の司會者ぶりを見せて呉れるし

懇親宴會では、自己紹介で僕が全くの一讀者であること知り乍ら同人に等しき歡待ぶりを惜しまれなかつたし

緑雨さんがむつくり屋でなかつたこと。鐵道ホテルで、萬よし、亂耽兩氏の洒落の應酬が面白いといつて路郎主幹が、子供のやうに轉げ廻つたこと

さる又一つで笑つてゐる萬よしさんの肌が青年のやうに若々しかつたこと——僕は二三年壽命が延びたやうな氣がした。



壁

前田五健選

工場の壁に四五年前のピラ
寺の壁撫でるだけでも有難し
廣すぎる壁に額など買ふてくる
壁一重鉄が汚へる夜のしぐま
田園詩壁の白さに夕焼ける
壁一重隣と別な飯が煮え
反抗が便所の壁へ文字となり
風邪氣味に白壁の陽まぶし過ぎ
白壁へ風無表情に當つて晝
わが趣味を壁に貼つて二三枚
壁に背を向けて優しい母と居る
新らしい壁に曲線一つ三つ
よりかゝれども壁のおもたき
壁が心臓をせめつける一夜
夕焼の白壁隠れん坊の鬼がある
松之助壁の中へと消えて行き
膝抱いて身より今なき秋の壁
張替へる壁紙喫茶儲ける氣
そろ／＼と轉宅したし壁にあき
先代の寫眞壁から睨らまへる
壁隣り聞へよがしに子を叱り
塗立ての壁へ指先觸れてみる

九 正 憲 孤 新 史 翠 青 小 世 曉 夢 汀 美 千 同 錦 明 承
天 甫 草 鶴 市 郎 穂 波 助 都 童 迷 雨 津 雨 石 珠 春

目張りせし壁へ高熱續くなり
壁の冷き日部屋亂れるたる
白壁の何か書き度い男の子
屈辱のハツキリ見へる白き壁
塗り立ての壁へ自動車泥をつけ
白壁に墨黒々と運送業
白壁へ桶もたせかけ秋晴る
白壁の此の邊ズート資本主義
壁諸共に火の要心剥けてゐる
め一重階級制が異ひます
アパートの壁はあまりに冷たす
白壁に聴くとヤツパリ泣くと云ふ
バツトの煙壁を這ひゆく
壁隣主人の顔をまだ知らず
秋風が突き當つて寺の壁
仁丹の軸壁へ貼る勉強室
白壁が先づ道順の的にされ
歸郷して煤けた壁の懐しく
塗り立ての壁へウツカリ叱れる
喜捨の札古寺壁に長短か
壁の影氣になる父の年配だ
觀念の視線をそつと壁へ向け

ライト 十 紫 岩 良 愛 笛 義 山 磨 青 小 菊 富 葉 天 一 春 柿 清 好
靜 陽 石 祐 子 秀 風 月 雄 羊 踏 櫻 路 美 三 光 馬 可 峰 夢 春 春 啓 兒



ある私共にとつて誠に欣快の致りです。尙本
句會のため遠く函館青森福島千葉松本
甲府大阪横濱から出席された方並に御聲
援下された方々に厚くお禮申上げます。
▼本社東京句會の爲め本社から左の方が特
に出席され大活躍をされました。

主幹 藤生路郎
總務 橋本緑郎
編輯長 福田山雨樓
編輯同人 高橋かほる
同 朝田新水
同 吉田萬車
同 庄田翠夢
同 生田翠夢
同 大村西松
同 石井根太郎
平井内機
竹井春見
光緒友會
誌友

▼本社東京
句會は關東
川柳家諸氏
の熱誠なる
御賛助によ
つて大盛會
裡に終了し
た事は日本
の歴史とな
つて永遠に
傳へられる
ものでして
未を汚して

壁一重生活層が變つてゐ
雲燒けの都屋が淋し秋の壁
白壁に影を寫して柿熟れる
壁の秋蠅の動かぬ昨日今日
高熱にうがされ夜の壁のし
迎へて呉れる白壁もなし
金言は壁に貼つとくだけの
壁紙の柄臙臙と持つコッブ
壁よ壁夜の秘密の多すぎる
金閣寺矢つ張り壁は土であり
恐縮の尻のあたりが壁にふれ
壁落ちた箇所を氣にして秋深し

佳吟

いわを
竹雅
莞路
三都
錦城子
たけを
利生
櫻天
六文錢
喜由
啓秀

大部屋の壁は黒板ほどにかき
壁に足あげて獨りへ電氣つく
セコンドの音が壁にしみ込^なる夜
影一つ動かぬ秋の壁の色
壁紙の柄とマダムを見くらべる
失戀に壁は怒濤の色に似る
いさかきを壁に知らず居る如し
壁白うばくの病みのいろとなる
煩悶の夜へ壁の染み動き出し
一人子の壁に向つて意地を張り
追憶の一つが壁にマザと見ゆ

剃刀

九文錢
某人
たけを
機見女
利生
青踏
青兒
貧兒
鴉天
紅とし

秋は來ぬあゝ剃刀のきつ先に
葉之助

壁の凹みを數へ退屈
左官は壁へ唄をぬり込む
精銳吟
嘘つけば壁眞白く點りゐる
壁に閉けば廻れ右せと仰有つた
失戀の型に倣つて壁に寄り
サイレンが響く炊事場の壁
壁と壁シリ／＼迫る月の末
壁の壓迫に負けた目が痛み
感吟
白壁に泪を塗れば吸み込みぬ
壁の威嚴へ信心の衆
健

選後隨筆

喜由
小舟
山
葉
喜
由
山
陽

○誤字脱字、用紙の不整頓、不鮮明な字、惱
やましにけりてであります ○全般觀點其他
は毎度、先輩達の云ふ通り、つまり型の如
くであります ○中村よしを氏が、提唱する
一行詩、國詩、日本國民詩、從來の俳句を
清算したと云ふ吟、の風格、川柳が、チヨ
イ／＼あつた、自由律、無律、定型律へ自由
律と無律とは一寸似て迷ふ、その何づれに
せよ、川柳呼吸律味が、缺けて居たのは遺
憾であります ○澄み切つた秋晴、松山城
が浮いてゐます。今日一〇、一七日

廣江天痴人共選

心も錆し、剃刀も錆し同
鏡に白き剃刀の音 曉童

出發の當夜(十四日夜七時二十分大阪發)御
多忙中にもかゝらず御見送り下さつた左
の方々に厚くお禮申上げます。
▼本田溪花坊、森雞牛子、森牛疊、柴谷柴舟、
福田鶴峰、永田里十九、揚井二南、須崎豆秋
姫田夕鐘、奥野亮山、安井ひろし、北川あや
美、川合丹々、竹内忠之助、竹内清美、吉田
一郎、生田正治、高橋ふさ、高橋房子、芝四
葉、今江勝太郎の諸君外數名、京都驛では平
岩司郎君。
▼本社十一月の例會を廢してのんびりとし
た。植物旬會を催します。當日商工祭で天王
寺公園も賑ふことであり、茶臼山の新公園と
植物園大温室も特に公開して貰ふ豫定。
▼川柳旬集、潮騒刊行記念旬會に際して住
田亂耽君の母堂からお菓子の寄贈をうけま
したが豫想外の多數の出席者で、全部にお渡
しが出来なかつたこと、會場の不行届でし
た事をお詫び致します。
▼出雲大社松江分教所の秋季大祭が、十月一
日より三日まで執行されたので、松江支部幹
事柳人君始め都之介、卷二、祥月、夢迷の諸君
が川柳漫畫の掛行灯を奉納したので、大好評
で分教所管長より感謝されたとのことです。
▼今里支部の創立旬會を、別稿の様に梅田支
部と天王寺支部の後援によつて十一月十一
日夜端の坊で催されます。
▼天王寺支部では山本葉光君が十數年來病
臥されて川柳會場などへ出られた事がない
ので慰問を兼ねて十一月七日夜葉光君の宅
で催されます。
▼須崎豆秋君は東京旬會のため東京附近の
川柳家住所録を「いろは」別で六百餘名を作
製されました、同君の努力を感謝致します。
▼松丘町二君は九月廿四日、保津川下りをさ

スイスイと剃刀の味、秋の味いの助
剃刀の心にいつそ住まんなかな 機見女
剃刀へふつと動脈考へる 利生
剃刀の下に經濟難の頼 竹雅
剃刀へ乳房くはへた首を振り 禿山
Ⅱ(朱いペン跡)Ⅱ右八句を佳句として
頂きました。心中と剃刀、ニキビと剃刀、
日曜日と剃刀、理髪店と剃刀等々なんと退
屈な句が多かつた事でしやう。そして古典
調がなんと多かつたでしやう？ 私達の神
經中樞へはあんな古句と同じ間伸びのし
たりズムはピンと應へませぬ。皆様の日常
生活を句に生かして下さい。起重機の如く
力強い、柳を作つて下さい。

(三三年九月十六日夜記)

◆ 翠夢選

剃刀を持つにも女のしながあり 氷炭
剃刀は心裏切る手に動き 義風子
剃刀と云はれた腕の姿びやう 利生
剃刀を當てた其日は氣も若し 芳一
剃刀は子供の聲に手を休め 伊勢子
年寄の眉毛位は剃れるなり 今雨
おついでと剃刀の手を借られる 啓秀
襟剃りを夫にたのむ若い妻 銀波
待つて呉れ今髭をあたりかけ 一柳

剃刀に寫る自分の鼻の影の紅
剃刀の跡青々と朝が出る 正浦
片眉毛剃れば鏡のまぶい朝 葉光
剃刀の双よりも細く眉を引き あや美
もすこしだ待てと剃刀忙がしい 九文錢
剃刀の錆びたに戀の遠ざかり 新水
髯をそる窓のむこうの日本晴 小樓
剃刀はあれど鐘は人がたち 幸捐
デレットをといでは見たが金^がな 天馬
剃刀へ乳房嚙へた首を振り 秀山
剃刀のまゝ朝風呂は聲をかけ たけを

佳吟

剃刀の下に經濟難の頼 竹雅
剃刀が惱む風呂屋の灯の角度 春光
スイ〜と剃刀の味、秋の朝の助
心も靖びし、剃刀の錆びし 葉之助
剃刀を沈めて夜の金盥 青踏
剃刀をあてゝ己にかへるなり 明珠
人
剃刀の冷たき音も倦怠期 曉童
地
剃刀へふと動脈を考へる 利生
天
剃刀の心にいつそ住まんな 機見女

れて左の句を寄せられました。「保津川を十人てくどる佛の日」

▲大島藩明君は十月一日大連を出發して京城、金剛山、元山、清津、羅津、雄峯、東朝鮮を視察、七日間島着、更に圖寧線、天圖線工事の視察、教化、吉林を経て十三日新京到着十六日に大連へ歸へられました。
▲川柳「みちのく」は菊判になつて發展しつつあります。

▲六角桂風君は滿蒙特産物商を大阪市浪速區大國町五丁目で開業され、隆盛の由、今回川柳に復活されました。
▲上野錦水君は多年小松支部幹事として活躍されておましたが、家事の都合で、退社される事になりました。一日も早く復活を祈ります。

▲水田光哉君は多年加古川支部の幹事を務められておましたが、今回家事の都合で、退社される事になりました。一日も早く復活を祈ります。

▲松丘町二君の令聞は十月七日夜から發病されて朝夕の食事一切を、町二君なされる由一日も早く全快を祈ります。

▲山本雨迷君の嚴父が十月十六日午前十一時永眠されましたので十九日午後三時長柄葬儀場で告別式を營なされました、本社から路郎先生、翠夢君、汀柳君と私が参列しました。哀悼の意を表します。

▲本社東京會館の翌日中禪寺湖一伯、歸途十七日朝松本の石曾根民郎君を訪れて淺間温泉で柳談と山の話に時をすごして午後三時二十四分の列車で歸阪致しました。

▲本號の編輯は本社事務所より山雨樓、鶴峰、水車、機見女の諸君と私とで致しました。

雜筆春秋

青い歌姫

—とぎれとぎれなおもひで—

正岡 蓉

……はじめて麻生路郎氏にあつたのはある夏の夜の「番傘」のつどひであつた——そのかへるさ、橋筋でだつたか、南海通りでだつたか、ほんとうの挨拶をかはした。

西村酔香君や故大藤治郎君のことを歩き乍ら少し話したやう覚えてゐる。——それにしても、大正十二年の夏といつても、もうはつ秋であつたらう。

自分はさうして西の宮にゐたころか、十三住居かあの寶塚と云ふ温泉まちに自分の半生の情熱をみんな投げ與へた青い歌姫が、肺を病み乍らそぶらのをうたつてゐたころの夢である。

一生にもう二度、あゝいふ世の中ですべてが榮光におもはれ、身も魂もが虹いろの戀に塗りこくられるやうな日は來ないであらう。

同時に、一どでもさうであつた自分をせめてもいまは大へんな欣びとし、幸福としなければなるまい。

思へば、狂へる辻潤が舊著「すべら」で、嘗つての愛人伊藤野枝の死直後、その愛戀を追憶した「ゆうもれすく」を愛讀措く能はざる自分であるが、そこにもいま、こゝへかいたのと、ほゞ同じキモチがすい／＼と迫る哀しさでかゝれてあつた。

——さて路郎氏のことか些か岐路になつたが、まづとうな印象記でもない以上それは許して頂き度い。

春團治のムラサキと紅の交錯した羽織に「おゝさか」をかんじ、美男で菊石の枝雀は古い浪華の寺町の破れ壁を示し、枝太郎は枝太郎で京の人らしくあくまで島原の太夫の口紅のいろや、大丸屋の若旦那のかないあいそびの心イキをおしへ

た。

いまでも老後をやしなつてゐる松鶴や米團治も未だ／＼元氣で達者であつた。圓子が開化なすてゝこをおどつた。文團治は憎ていだつたが皮肉に巧くて、間もなく死んだ。

私たちは、よく法喜寺をでると、直營のビールへきておそくまでのんだ。酔ふと自分は、寶塚にゐる歌姫のこと許り云つた。

さういふとき、未だ大阪に友達のなかつた身には、一とあし先に下阪してゐた吉岡鳥平がいつでも一しよにゐては他愛ない、自分の酔態の相手をして／＼してくれてゐた……。

この鳥平は、のち、路郎氏とは大へん親しくなつたのだが、彼先年歸京して未済えず、空しくこの陽春、死んでいつた——人と容れない所があり、それが災をしたのだが（と、自分も云へたギリではないが）決しておしまひは華やかとはいへなかつた。——私は故あつてその死に侍らず、葬禮にも列しなかつた。

たゞ徳川夢聲・その遺族慰安演藝會で

神樂坂演藝場へゆき、かへり、彼氏と銀座の「かもめ」で飲んだ。——鳥平は酒徒ではなかつたが、酒をのんでの追憶和讃をキラフ佛ではなかつたと云つていゝ

いや——それはそれとして、とまれ私は大阪で世帯をもつてからは正貞、精神生活にめぐまれなかつた。いまでも大阪の街々を好むが、そこへ自分といふものを登場させて涙ぐまれるほど懐しいのは未だ「赤い灯、青い灯」のなかつた大阪そぶらの娘と戀しあつた時代の大阪——長堀カフエーにムラサキの灯が點り、そこに五月信子似の白いエブロンをした女給さんがゐて、川口松太郎や岩田專太郎とD.A.を上げたりした大正十二年の大阪である。

路郎氏への印象もそのころの第一印象がそこで一番ハツキリされてゐる。

太平洋に面して僕は馬鹿でしたの句も好きだが、春團治はのど首から笑はせるといふイミの句——あれが自分の好みから、そのころをおもつてなつかし

い。

何といふ句か、おしへて下さい……

建權のこご

森 東 魚

加多の句に就て建權の事を申述べた時云はすもがな憶説を書いて甚恐縮してゐる。建權に就ては秋の屋翁並に摩耶火氏からの教示を得て氷解した、感謝に堪へない。

(秋の屋翁より)

建權といふのは、漁父が遠洋に出漁の留守中に、妻が自宅に於て贅淫をするので、其時門口に權を立て、來客の有る目印となすのである。本夫が遠洋より歸つて、この目印を見る時は、自宅に入らずに、他に避くる習慣なり、本書にありしを記憶する。

(綿谷摩耶火氏より)

加太は今紀伊國海草郡加太、延喜式に賀太、靈異記に蚊田に作る。木本村の西

北に接し、葛城山男三山脈の西端に在り淡路島と相對し距ること四海里、古來俗に婦女の守りと傳ふる粟嶋明神あり、又有名な紀國屋文左衛門は通説には熊野の人と云ふが、一説に(本朝處初新志)實は加田浦の人と云ふ。全村漁人の家で、此處の漁人は遠く九州、房總等にまで出稼ぎする故、家に歸ること稀なる故、その妻、生活に耐えずして、平氣で男を作りて恥ぢず、不貞なるを通例とし、夫も是を普通事と思ひて責めず、家の表に權を立てあれば男の居る證として入ることなしと傳へる。又土婦、生活のため旅籠と契約して淫をひさぎ、風俗大いに亂れたる地として有名であつた。證文として一代男及紀伊名所圖會を引用しませう。

(二代男四ノ七)泉州の佐野、加葉寺、迦陀といふ所は皆獵師の住居せし濱邊なり、人の娘子にかぎらず、しれたいたづら所、そだちも物まぎれして、むらさきの綿帽子、あまねく著る事ざありける、男は釣の暇なく、其留守には、したい事して誰とがむる事にもあらず、男の内に

居るにはおもてに權立てしるし也、こゝろへて入事せず云々。

註、佐野迦葉寺は泉州なれど、迦陀のみは然らず紀州なり。

(紀伊名所圖會三)加太の手前、新田の條、此地最繁華にして、民家千餘家にあまり、都て是船商にして、東は總房、西は九州のはてまでも、いたらざる所なく、生涯半は外にありて、數十年に或は一たび歸るもあり、されば婦人つねに家をもさめて、遠近さだめぬとまり舟の、よせてはかへる波まくら、あだの一夜をなさけにて、世のうみ渡るならはしに、竿たつる名も、國の禁なれば、いつしかやみて、海邊につらなる逆旅、主人の來るを迎へ行くを送る小女郎の聲がましく云々。

これで私の憶説は全く反對の意味合ひである事が分つて甚汗顔の至りである。例句も明かに解せられて大いに喜ばしい二氏へお禮申上げる。

痣

西田 艸 樂

もうすつかり秋になつてしまつたのに

蒸風呂の様に暑い汽車から飛降りた私は或る驛で驛前の喫茶店へ飛込んだ。

小ザツバリとした、調度品と店構へが何となく落つきがあつた。

十六七の小女がある。

「バタ、トースコールコーヒを呉れませんか」

「おや！此の娘痣があるな、と見ると、厚化粧でもすれば消える位な薄さではあるが片頬の眼の下から耳のあたりまで擴がつた痣が頬の下の方へ次第に薄くぼかされてある。

やがてパンとコーヒが運ばれた。

上着を脱いでしまつて、白いワイシャツと白いズボンになつて卓上のパンをかちり、コーヒをすゝつてゐた。

よせばよかつたのに、私の癖でよく食堂なんかで雑誌を読みながら食を攝る。その時も文藝首都を携帯してゐたから、あるページをめくるのになくと無作法にも左の手にパンを持ち右手で扇子を持ち

その扇子を持つたまゝ比較的向ふの方にある雑誌のページを繰らうとした拍子に扇子の先がコップを突倒した爲め圓い卓上にコーヒが一つばいに氾濫した。しま

つた！と思つた時はワイシャツの胸から白いズボンへかけてべた／＼にコーヒを浴びてゐた。

「ヒヤー、えらい事をした。」

「まあ、お氣の毒」

薄い痣はあるけれど、中々愛くるしい小娘がハンカチでバタ／＼拂つて呉れた

「白いものにコーヒがつくとなか／＼落ちませんわ」と云ふ。

「兎も角もう一杯くれませんか。」

今度は何／＼と注意をしながら食べて居る間にほとんど濡れた箇所が乾いて茶勝つた鼠色の班點が地圖のやうに、ワイシャツとズボンに残されてゐる。

何氣なく、私は

「痣の様になつたな」

と口をすべらしてしまつた。

少女は無言のまゝうつむいてゐた。可憐そうな事を云つたと後悔しても追つつかない。

「お勘定は」

「二十五錢ちようだいします」

私は二十五錢を卓上に置いて、別に五十錢玉を少女の掌にのせて、そこを逃げ出した。三丁ばかりも大いそぎで歩いてそこでゆつくりと汗を拭いた事である。



現代江戸印象記

住田 亂 耽

OSAKAよ。ADDIEU!

澤山な川柳家諸氏に見送られて、わが川柳列車は、感激、昂奮の波紋の中を泳ぎぬけてやがてまつしぐらに、モダン江戸の紺碧の空へと速いピストン……。

種々な劇務の爲に、東京行を危ぶまれた程へとく／＼に疲れた路郎氏の看護卒として、同乗した私は、かなり氏の健康を氣遣つたが、食堂車の白雪によつて、漸次元氣を回復せられ、午前一時頃より快眠に入られたのを見て、やゝ安堵の胸をなでおろし、つひ誘はれて、沿線の夜景は默殺した深い眠りにおちいる。

TOKYO! TOKYO! 汽車の車輪

は高らかに東京行進曲をかなでながら、メトロポリタンに入る。省線から見ると江戸の姿は、たとへば、少し狭りつぱくしたニュー・ヨークに（勿論私は見た事はないんだけど）日本文字の看板があとちにあるといふ感じである。

シューツ、シューツ、

三太郎氏の顔が見える。その他、紅太郎、佐保蘭、玄六その他の諸氏が御出迎へ御苦勞に緊張した面持ちで、我々をWELCOME して下さる。尤も、三太郎氏の言を借れば、我々お上りさん連中

は、なか／＼緊張した顔であつたさうな。

どこか、とにかく一先づ休憩したいといふ路郎氏と共に、山雨樓、亂耽は、玄六氏を案内役に、三太郎氏を案内役顧問に、今夜の會場近くの所がよいといふ意見から、淺學は雷門ホテルを訪れたが、

こゝはダブルベット専門とかで、之には宿舎を避け、並木クラブへ荷物を一先づあづけて、さて、朝戻り氣分で、淺草を歩かうといふ三太郎氏の寸法通り、一歩々々歩を吉原へ、近づける。觀音様の兩側は、相變らずの店並のそのうちのある本屋で、エノケンの漫畫をかけた表紙がいやに強く僕の眼に映つた。

朝見る淺學の色は全く剥げてゐる。たとへば、玉木座も、江川劇場も、朝のエノケンの空氣の中の、妙にわびしき存在である。

池の端の回轉繞、ゆで玉子——あゝ然しあのゆで玉子屋は何故あゝも鹽が安いのであらうか。鹽の中に窺息しさうなゆ

で王子が山の如くにつまれてある風景に咽喉佛のあたりがへんにむづかゆくなる花屋敷のあたりで、小一洞氏と打合せに行つて玄六氏を待つてゐる間、しばしそこらを眺める。路郎氏は、十二階既になき淺草を敷き、「かにや旅館」といふ看板をみて、こゝらにふさわしき名なりと諧謔をいはれる。この場合かには、はさむものなり等いふは蛇足の尤たるものであらう。

小一洞氏の案内で「騎西屋」の樓上を襲ふ。出来、すものは——三遊亭圓馬、居酒屋の小僧の聲色にてよまれたし——「あら、こぶ、あんこうぢやなく、面喰ふ程餘り多く札がつるしてあるので、三太郎氏女中に寄問を發して曰く、「隣ぢや何くつてゐるんだい！」。

盃を重ねるうち、淺草時雨ばら／＼と来る。小生に句あり。

きさい屋の酔へ淺草時雨する 亂耽

こゝを辭して、三太郎氏は雀郎氏を引張りに出かけ、路、山、亂の三人は、玄六居のエキストラ居候となりにゆく。玄

六居でねむること數刻色々氏の珍しきコレクションを見せていたゞき、その上何くれとなき厚きもてなしに感謝の言葉さへ知らず、同氏夫人につきさぬ江戸情調の印象を抱きつゝ、バスにて會場へ急ぐ。定刻六時半、會場即ち満員の盛況、遠く晟修、不浪人、五花村、近く、劍花坊久良岐、諸氏の特に御來會を忝ふし期せずして、オールジャパン川柳大會の觀がある。

路郎氏一流の熱辯にて、完全に會する場一同を魅了し去り、三太郎、雀郎氏共に簡潔なる本社客員としての挨拶をのべていたゞく。

次に劍師、九段老人共に結構なる祝辭をいたゞき、同人一同肝に銘じて更に川柳光明道を邁進する拍車とする。

それより本社同人萬よし氏全國よりの祝電を市議で練つた咽喉から、よみ上げ更にこの句會に一屬の色彩を加へる。この間記念撮影あり、各選者(別項發表)披露のち、最後に路郎氏兼題披露ありてこの日本川柳發達史上の一大エボツクメーキングな會の幕を閉ぢる。

川柳植物句會

川柳ではあまりに植物の句が詠まれてゐないので私達よつて川柳植物の新境地を拓かうではありませんか。市立天王寺公園長宮南裕氏は柳の研究家であり植物に就ては尤も造詣の深い方でありますから植物に就て特に御説明下さることになつて居ります。萬障縹合せて御出席を願ひます。

日時 十一月三日午後一時(時間厳守)
會場 十三軒 大阪市天王寺公園ラザオ塔前

兼題 名所川柳「新世界」三句 廊生路郎選
會費 金拾銭(鉛筆御持参を乞ふ)

▼この機會に増築された植物園大温室と茶白山新公園を觀せて頂くことになつてゐます。
兼題と名所川柳は會場の受附でお渡し下さい。

主 催 川柳雜誌社

感謝

「東京句會」開催に際し、坂井久良俊、西島〇丸、森井荷十、川上三太郎、大谷五花村、龜井晟修の諸家から特に祝意を表され夫々金一封を戴き、宮尾しげを氏からは同書伯筆、久良俊翁賛になる柳翁の軸數本を寄贈して頂き、中村山門氏から「現代川柳名句選」數冊を寄贈されました。茲に右御好意に對して厚く御禮を申上げます。

各地柳壇

いあのを創れ



路耶・緑雨・二南整理

本社十月例会

於道頓堀俱樂部

十月六日

朝来の雨模様で集まりを懸念されてゐたにか、はらず、路郎師を初め熱心な柳友たち
に初めての人、久し振りの人などの顔も交へて和やかに秋の詩作氣分を満喫した。

路郎師は本社句會での呼び物「名所川柳」の「築港」披露後目前に追つてゐる東京句會についての御希望などのお話があつて、十時頃散會（豆炊記）

出席者

路郎、緑雨、史康、山雨樓、豆秋、鵜足、八歩、えいを、四葉、一笑、里十九、鮎美、角丸、紅、機見女、かほる、艸樂、素月、春光、禿山、末雄、變人、白柳子、冬光、小柳子、夢裡、丹路、萬よし、藤太郎、杏三、水車、櫻天、夕鐘、雀踊子、町二。

席題 鐵砲

山雨樓選

豆鐵砲にあはれ死にける

鐵砲はなげしに女ばかりなり

鐵砲の音に氣づいた渡り鳥

鐵砲を研がいて秋もさ中なり

鐵砲と犬と淋しく戻つて來

鐵砲も犬も疲れて鳩一羽

鐵砲を持つ父親をうれしが

鐵砲の的に血潮のうごくなり

鐵砲のさびしき雲に打ち損

銃先の一瞬に在る秋の聲

占領をした鐵砲は高く上げ

（人）鐵砲に似たる若さを喜ば

（地）居酒屋へ來た鐵砲の置

（天）鐵砲を向けたに雀たわ

（軸）鐵砲は床へ飾つて孫の

席題 厄年 綠

雨選

小説を讀み厄年をふと思ひ

厄年を讀み厄年をふと思ひ

厄年になつて未だ一人なり

厄年の天井ひくながめたり

厄除けをかこつけて旅の人となり

（佳）厄年の二人が逢ふと酒にする

（同）厄年の後姿へかけるもの

（同）厄年の子供を空にさしあげる

（同）厄年の殊更寄附を云ふて來る

（同）厄年の月賦が今もつきまとい

席題 人波

かほる

人波を見て白井さん笑つて

人波の中に笑顔を見つけた

人波の見知つた顔は連れて

人波へ一列と云ふ驛の前

人波がいつそうれしい二人

人波を分けて無口者の汗

お稚兒さんがまっ直ぐ歩く

人波に昨日見といった特

友の名を呼んで人波からの

人波を二階から見夏祭り

人波へ背高い兄を頼り切

人波を逆らひ母の落し物

人波へウンと水な撒いてや

人波を分れて親分なつと

席題 聲

鮎美

まっすぐに歩めと後の父の

かすれた聲に心見られし

借りに來た方はうつる笑

徹夜した聲なり少し怒つて

横顔と後ろ姿の聲を聞き

小柳子

艸樂

鵜足

鮎美

夕鐘

變人

水車

鵜足

山雨樓

路郎

春光

四葉

えいを

禿山

機見女

變人

艸樂

杏三

鮎美

綠雨

冬光

同

里十九

同

美選

櫻天

機見女

八歩

夢裡

かほる

後から笑つた聲で振りむかせ
さうだらうあれば署長の聲がかり

恩師の聲に肩たゝかれる
(佳)聲美しき木犀の咲く

(軸)の聲にもあらずホトトギス
席題 故郷 柳 立機見女選

色白うなつて故郷の驛に
郷愁をも都を捨てる日はいつぞ

家も田も無いが故郷の忘れず
故郷へ歸れば友の眉太き

故郷に埋めし涙の壺よ
風はやほらかふるさとの畑に

故郷で夫を連れて愛想よし
故郷の障子の暗きなつかしく

ふるさとへきつちり坐らされて
爪切つて妻の故郷の三日間

草疲れて故郷の晩をくぐれる
故郷の小川の巾を狭う見る

故郷はあの娘が何時か母となり
故郷は夢を打つなり汽車の窓

土産物故郷のいろを見せ秋
老婆の騒ぎは故郷の夢のこと

故郷がないのを誇る釜ヶ崎
席題 水道 互選

騒しく共用栓へ朝が来る
水道へバケツの音の荒々し

水道にタガールを載せて無口者
障子洗へ水道の冷え

水道のネジがゆるんで晝静か
水道へ叱らねがら連れこまれ

水道をだいいん使ふ早替り
かほる

緑雨

路郎

山雨樓

鶴足

鵜美

雀踊子

四葉

史康

小柳子

杏三

鮎美

山雨樓

路郎

白柳子

同

禿山

同

水車

同

萬よし

同

角丸

一選

素月

小柳子

變人

かほる

共用栓ひつて今日の空をみる
集金へ水道ビタと止めて出る

朝起をした水道の強いこと
料金は知らずメートル丈を聞き

不意客へ水のあふれる音がする
水道の音が氣兼ねる二階借

通夜の紅い水道チヨビリ一階
水道の夜いたすの真ひるの中

水道のれぢのかたきの妻の留守
席題 べんちやら 互選

べんちやらも嬉し丸髻よくつり
べんちやらの腰のりのたよりなき

べんちやらに添えて空氣を叩く
おべんちやら降り出したのも知らず

べんちやらの後の寒さも午前二時
べんちやらが上手鼻は低いなり

べんちやらを聞き流すほご世間馴れ
べんちやらを聞いて請求書を貰ひ

べんちやらのおほきくみ紅提灯
百燵の下でべんちやら言つてゐる

柳柳維誌松江支部 柳翁忌
松江番衆川柳會

九月廿三日夜 於出雲ビル三階ホール
兼題 焼香 可選

焼香にきつと敵は討ちまする
焼香の長さ故人の徳が見え

焼香の後へ寂しい虫が啼き
焼香に極はつきり見直され

沈黙する焼香の煙つて
順番で焼香へ詫びを言ひ

焼香へ面をあげぬ母が立ち
鼻緒

鶴足

山雨樓

白柳子

禿山

機見女

八歩

紅

一選

素月

春光

豆秋

白柳子

變人

水車

艸

鮎美

杏三

焼香へ恩師すまね落ちてぶれて
焼香へ妾今立たうかと思ひ

焼香に白足袋同志入り替り
焼香の姿武人の妻として

焼香へ昔の恩はよみがへり
焼香へ救はれた様に嫁は立ち

焼香のまはり香らぬ花ばかり
焼香に近代めな髪のかかり

焼香に去らうとしない女の子
焼香はあとなる程早く済み

焼香の煙一すじにあきらめる
焼香の不覺の涙見つけられ

(佳)佛心になれず焼香済まされる
(同)焼香へ大禮服の派手すぎる

(同)焼香の座へ人並について行き
(同)焼香をす子の年を聞いて見る

兼題 釣鐘 柳 人選

沖はるかまでも釣鐘晝を告げ
うとましき世を釣鐘は嘆くのか

釣鐘の残暑へ蟬が来てとまり
早魃の村釣鐘までが險悪だ

釣鐘の愚痴を突いてる寺男
一錢で打つた釣鐘旅の空

文明に逆さ釣鐘鳴つてゐる
尼寺の釣鐘さびれ

釣鐘の音に轉向ほのめかし
釣鐘の音に尖道湖夕焼る

釣鐘の音に待ち人襟をよせ
釣鐘の餘韻へホームシックな夜

釣鐘へ夜の不氣味が見直され
墓路

一三六

春洋子

都之介

祥月

子風

三郎

一選

荊湖

金葉

砂詩郎

墓路

都之介

天痴人

磨須雄

九紫

人選

子風

都之介

天痴人

鐵花人

春洋子

夢迷

都之介

砂詩郎

夢迷

舟帆

墓路

釣鐘に憂うつ そうな雲行だ
釣鐘に見學團は丸くある
釣鐘なこは忘れた文化村
夢幻の様は釣鐘耳にする
十客國寶の釣鐘不幸に續く寺
（同）釣鐘の音に思想も綻るびむ
（同）釣鐘の餘韻に本堂揺れるやう
（同）夜の幕を下ろす釣鐘鳴り渡り
（同）釣鐘の餘韻九月の雨にぬれ
（同）俗界へ夜が來るぞと暮れの鐘
（同）さあ皆を歸るお寺の鐘が鳴る
（同）黄昏の寺釣鐘のゆううつだ
（同）釣鐘へ黙したき日の陽が落る
（同）釣鐘の餘韻へ満月浮き上り
（同）釣鐘へ夜の雰圍氣匂ひ來る
（同）釣鐘の音二つ三つ灯がふえる
（地）釣鐘が鳴る安靜な生活だ
（天）味噌汁の香に明ける釣鐘堂
席題 鳴子引つばら 天痴人選

赤陽 檳榔 舟帆 祥月 鐵花 都之介 墓秋 三雷波 赤陽 銀星 九陽 赤陽 赤陽 天痴人 紫明 可明 都之介 若二 喜郎 雪緒 夫鳥 砂詩郎 荒路 喜郎 祥月 九紫 荅二 柳人 梟人 玉葉

（同）女房が鳴子のヒステリック
（客）雀思ふに鳴子は得體の知もち
（人）鳴子繩一羽は別な方へ飛り
（地）スケツクに鳴子の綱に切居り
（天）斥候が鳴子の綱に引つかり
席題 感 激 三雷波
感激の二字に割込み隙はなし
感激をして向上の一步踏み
感激の餘波カフエになだれ込み
慰問狀一年生の筆蹟と判り
感激の空を仰いで呼吸する
感激の子に約束の金が必要
表彰の皆感激の顔になり
感激を心苦しく受けてゐる
（秀）感激は母校の勝つた聲になり
（同）感激の我れに歸れば腹が空き
（同）終りまで聞かす感激としまひ
（同）感激を異郷で聞いて涙ぐみ
（同）感激は無言のまゝを喜ばれ
（同）感激の一夜手紙を認める
（同）感激は鈍子の數が増すばかり
席題 太平洋 都之介選

柳人 都之介 銀星 雪緒 砂詩郎 華雪 天痴人 可明 玉帆 舟帆 青波 青秋 墓秋 舟帆 耕二 粹浪人 粹浪人 砂詩郎 夢迷 粹浪人 粹浪人 青波 華雪 青波 青波 青波 春洋子 子風 九紫 粹浪人

アマが飛ぶ夜太平洋は黙したり
（秀）建線に渡られさうな太平洋
（同）建線の響太平洋が揺れる
（同）早廻り太平洋の端をすぎ
（同）難波船太平洋の隅のすみ
（同）御棧威へ太平洋は安かりし
（同）砲臺が退屈してゐる太平洋
席題 夜遊 舟
夜遊は酒の匂ひを連れてゐる
夜遊が月を憐む様に照り
夜遊が家庭の波瀾くする
夜遊が人の知らない雨に會ひ
夜遊が叱られてゐる非常線
憂鬱となり夜遊は胃をこわし
夜遊が別に家業は勵むなり
心境の變化夜遊が内にゐる
夜遊が一番鶏を聞いて寝る
夜遊の伴へ父は老けるだけ
（佳）夜遊の至んだ朝日喫る
（同）夜遊に叮嚀する運轉手
（同）夜遊がハハッキリ霧の街と
（同）夜遊の戻り人輪の垣になり
兼題 教 養 大

夢緒 雪緒 天痴人 可明 荅二 赤陽 可明 帆選 柳人 三雷波 華雪 天痴人 紫明 粹浪人 粹浪人 華雪 墓秋 檳榔 雪緒 可明 耕二 鳥選 砂詩郎 柳人 磨須雄 可明 銀星 青波 三雷波 墓秋

(同) エプロンの動作に教養句はる
(同) 教養をうたがはれてる酒の席
柳 子 風 人

二選

冷静になれば女因の素直なり
獨房の女因乳房のうづく夜
飲ませたい乳房女因は泣いてゐる
玉 葉

(五) 故郷を忍ぶ女因は窓に寄り
(同) 女因ふとやつれに悔ひし水鏡
春 洋 子

(同) 腹の立つ事も女因はうなだる
(同) 泣いてゐる女因と女房同じ年
青 波 月

(同) 秋来ては女因の若さ持て行き
(人) 別な目で見る女因は下を向き
雪 路

(地) 女因歸しつかり似合ひ模範因
(天) 面會の聲に女因は髪をなで
可 明

川柳 神戶句會 (神戸)
雜誌社 十月十四日 於明珠居 明珠報

兼題 昔 明 幸 捐
柳 月 楓 竹 吉 高 貧 春 捐
左 右 雄 秋 秋 選

歴史家の話へれむくなる子供
解近へ昔ながらのふみを見せ
昔のおもがげを煤煙に任せ切り
一と昔語るにお茶を替へに立ち
ばあさんの昔話しへ外は雪
あざ道の昔話へ陽が落ちる
としよりの機嫌は昔はなしなり
幸 捐
霞 川 春 秋 貧 秋 選

駄菓子屋へ母さんと来る女の子
天才を呼べばばんやりやつてくる
来たゝと走る子供へ落葉する
秋の雨師匠の家へよつて来る
席題 父 母 春 秋 選

父は、へ詫がる女中の太い指
父母健在嫁をもろふてよい自分
本心にかへれば父と母の顔
明 殊

氣が變はる度に相場で損をする
移り氣な笑はれ乍ら髭を剃り
(軸) 移り氣へつめたくふと秋の風
明 殊

誘惑へこんだ口笛吹いてゐる
誘惑の初めは煙草教へられ
誘惑とネカンサインへ辻を折れ
誘惑へ甲板の月冴えて居る
誘惑に勝つて淋しい窓に立ち
誘惑を誰にも告げぬ秋の暮
撫でつけた髪誘惑もあつて欲し
春 秋 選

誘惑へ娘まつ直く歩くなり
誘惑に勝つて淋しい窓に立ち
誘惑のひしひと迫る暗い部屋
女と云ふもの、誘惑されたと云ふ
なでつけた髪誘惑もあつてほし
誘惑の教へてくれた支那煙草
吉 左 右

川柳 高知句會 (高知)
雜誌社 九月二十一日 於ブラジル樓上 小松蟬風報

集金の今日は嬉しく疲れたり
宴會の疲れに樂な廻り椅子
一着になつた疲は肩を借り
愛人へオール疲れを知らぬなり
只歩くだけに疲れたお嬢様
青 雨

盛場を漸く越した乳母車
正直な汗へ漸く恵まれる
やつと來た岸で一波見舞はれる
伸裁もやつとかや顔になり
應接間漸く借れた顔で出る
原稿が漸く賣れた子と涼み
映 珠

癒へかけた病舎の窓へ天高し
天高く晴れて母校に旗が揺れ
(人) 出稼に空の模様は淋しくて
(地) 鎌を研ぐ父子微笑む虹の色
(天) 朝の空視凝て愁の多い顔
(軸) 傷心の眸に碧い空
青 果 選

書置に連あるとは書かぬなり
書置は前途を暗ひものきめ
便箋へ書くと書置らしくなし
長男とて書置へ氣をとがめ
書置へ今宵限りの墨の色
(佳) 書置へ父母の名を書く手の震え
(同) 書置になつて潔白賞められる
(軸) 書置へ舌がもつれた義理の親
青 濁 映 同 草 映 梨 珍 果 選

母の無い娘の佯びしきの星祭
希望など無いとは女給のめるなり
病人も無くみのつて鎌の艶
雁鳴いて父なき子等は淋しがり
水 選

同 濁 水 青 濁 映 同 草 映 梨 珍 果 選

同 濁 水 青 濁 映 同 草 映 梨 珍 果 選

同 濁 水 青 濁 映 同 草 映 梨 珍 果 選

同 濁 水 青 濁 映 同 草 映 梨 珍 果 選

同 濁 水 青 濁 映 同 草 映 梨 珍 果 選

同 濁 水 青 濁 映 同 草 映 梨 珍 果 選

火鉢の灰へ空想の文字
灰色の空へ不平なげつけ
佳沈黙へ煙草の灰がつけ
(同)經香の灰が積つればよし
(同)父を疑へば灰色の空あり
席題 群衆 熊谷紅選

群衆の動きへ
青い空
ゆれ
岩

群衆に答へる様に雪が飛ぶ
同變人

（佳）群衆をはなれ個性を取戻し
八歩

(同) 群衆が去ると巡査は水を呑み 艸 樂

(同) 群衆の中で兒の名を呼びつけ

（轉）群衆へ吾は金子の身かたにて
席題俳優變人選

俳優へ電話はすれた聲をだし 八歩

俳優へなれる顔して十八九
雅幽

同よし美非憂を知つて居るのが自慢なり

俳優の各指へもめる繪看板 岩石

お妾の部屋は役者の額をかけた同

佛僧の飯も食て來た出前持ち
葉六は舞臺を意識せぬ如し
司 練

席題 非常時、切符 互選

非常時へ指紋のついた世界地圖 紅

非常時へ今日も国防婦人会一笑

非常時の君ようれしき豫備少尉 岩石

非常時を叫ぶ男の空財布 同

非常時へゆくへの知れぬ子を思ひ 變人

食はれないものも非常時きつさる

途中下車帽子に切符のぞかせて
割引きの切符は肩にのしかゝり

阪大川柳會 (大阪)

丸島利生 報

兼題 夕陽路

日の落ちる海の彼方に母あます
落日に島の娘が並んで居
貸家机夕日の中にいて通り
落日はトマトにも似てまんまるし
英傑の末期に似たる入日なり
戀をする猫に嬉しい夕日なり

兼題 洋食路

嫁く娘へ母洋食を喰ひ習ひ
洋食の出前二階の人のです
秩父丸着いて茶漬を褒めちぎり
二錢カツ、ツ馬は汚れた顔で居り
洋食を習つたと云ふ嫁が来る
じやが辛があつて洋食らしく見え
洋食と聞いて欠席多くなり
ノートでは美味しい筈の洋食よ
手料理へ切れぬナイフを添へ詫び
ウインドの大きなカッを見て這入り
五階までカレーライスを喰ひ行き
ピフテキに皿まで切つた音を立て
(人) カツ二丁通して後は顔と顔
(地) テキ二枚旦那の來だを知てる
(天) 君の指アスパラガスに似て細し
席題 女將路

同 紅

芳一

水炭

山彦

正甫

芳一

同 炭

同 炭

同 炭

同 炭

同 炭

同 炭

同 炭

同 炭

同 炭

同 炭

同 炭

同 炭

同 炭

同 炭

同 炭

同 炭

同 炭

同 炭

同 炭

常に似ず淋しく語るマダムなり
女將にも顔を知られて借が山來
こんな婆々にといふが女將口に
身一つな女將にまかす不倖
お二人へ女將さまりを云つて立ち
長火鉢女將の横は座りよし
手を握られても女將たちるかす
女將さんにせかれて妓切ながり
長火鉢の前に女將はにがり切り
ウエイトレス。マダムの意圖を知
輝をさせてもみたない女將を知
女將さんをもつて來てある出合
女將さんの犠牲になつて勤めてる
清も濁も金には強く女將であ
送らせて家を見ずるも女將の手
梳髪であつても女將に香は残り
あゝは言つたが心で泣いた言ひ女將
段梯子女將眉間と何か言ひ
若旦那女將が出るも他愛なし
こはいものゝ一人に女將居るの
たしなめて女將ホホと笑つとき
借金と言ひ分け女將膝を立て
事毎に女將八掛を見て貰ひ
(人) 一人身の様に女將は云で置き
(同) 鏡からもいふてある女將さん
(同) ヘットライト女將の羽織るなり
(地) 八々になる頃女將もどつて來
(同) 鼠に引かれまつせ女將上つて來
(天) 来るまでの酒は女將に酌がど
(軸) 奥さんと女將肝膽相照らし
(同) 色氣ぬきを女將へうぼうし

同 山彦

同 秀彦

同 生

同 生

同 生

同 生

同 生

同 生

同 生

同 生

同 生

同 生

同 生

同 生

同 生

同 生

同 生

同 生

同 生

同 生

同 生

同 生

同 生

同 生

同 生

同 生

同 生

(同) 女將の子實は落胤とも云はれ
川柳 今治句會 (今治)
雜誌社
拾月七日夜
兼題 曉童居 渡邊曉童報

兼題 曉

兼題 曉

兼題 曉

兼題 曉

兼題 曉

兼題 曉

兼題 曉

兼題 曉

兼題 曉

兼題 曉

兼題 曉

兼題 曉

兼題 曉

兼題 曉

兼題 曉

兼題 曉

兼題 曉

兼題 曉

兼題 曉

兼題 曉

兼題 曉

兼題 曉

兼題 曉

兼題 曉

兼題 曉

兼題 曉

路 郎

小 松

紫 陽

同 府

同 府

同 府

同 府

同 府

同 府

同 府

同 府

同 府

同 府

同 府

同 府

同 府

同 府

同 府

同 府

同 府

同 府

同 府

同 府

同 府

同 府

同 府

同 府

(同)約束が果した云ふお茶をのみ
(同)約束の花をむしつてまつてゐる

席題 後悔 青

後悔へネオンの灯まぶしくて
後悔の破る氣もなし花名刺

後悔の今日カレンダ―は赤
後悔の泪が光る五燭の灯

(佳)後悔のそれから夜具の温か味
(同)後悔へ亡母の笑顔を浮んで來

角力 吟

模擬店へ來てワイシャツの太い腕
秋風へ障子を重くたてに立ち

電柱が一本立つた小作の田
下宿部屋花瓶の花しほれ勝ち

席題 鳩

塔尖に射返す陽あり鳩の群
鳩ボツが豆と少女の寸劇よ

互

傳書鳩重い任務へつぶらな瞳
傳書鳩みんな助かる聲をあげ

登山靴重く山鳩さいてゐる
秋晴る、今日をお宮の鳩とゐる

神様の鳩に畑を荒らされる

心小曉 心小曉 心小曉 心小曉

府樓童 府樓童 府樓童 府樓童

心小曉 心小曉 心小曉 心小曉

府樓童 府樓童 府樓童 府樓童

心小曉 心小曉 心小曉 心小曉

府樓童 府樓童 府樓童 府樓童

心小曉 心小曉 心小曉 心小曉

府樓童 府樓童 府樓童 府樓童

心小曉 心小曉 心小曉 心小曉

府樓童 府樓童 府樓童 府樓童

心小曉 心小曉 心小曉 心小曉

カラス吟社句會報

(出雲田儀)

其ノ一

音、爽快、ズボン

泣いた子もズボンのまんまひしまい
勉強の頭を亂す水の音

爽快な風面を吹くバツカード
病中も母の足音知つてゐる

章鷹貫汀 泉水一雨

章鷹貫汀 泉水一雨

明選 曉童

心小曉 府樓童

心小曉 府樓童

心小曉 府樓童

心小曉 府樓童

心小曉 府樓童

心小曉 府樓童

心小曉 府樓童

心小曉 府樓童

心小曉 府樓童

心小曉 府樓童

心小曉 府樓童

心小曉 府樓童

心小曉 府樓童

心小曉 府樓童

心小曉 府樓童

心小曉 府樓童

心小曉 府樓童

心小曉 府樓童

心小曉 府樓童

心小曉 府樓童

心小曉 府樓童

心小曉 府樓童

心小曉 府樓童

爽快な満のしぶきにぬれて立ち
拍手の音日本の持つ強さ

其ノ二 朝日、機、華、元氣、机

華やかなダンサー乗せて終電車
黒檀の機かまへて主人ぶり

元氣な顔で一年生よくそり
もう處女でない朝窓の日がまぶし

横に通ふ蟹の如くに世にすれて
病人は朝日の出るを待ちわびて

はなやかな空想もして木の芽時

其ノ三 日光、悲観、慾、登

慾みんな捨て、しまつて一人ぼち
登の光に旅愁しみじみと

悲観の懐手へさわるお守り
慾深い奥にもひそむ人間味

登狩りに口實出來た夜を
月光にまざれて登逃げて行き

金策もつかずベンチに夜を更かし
睡蓮に日光ゆらぐ五月晴

佗しさ迷ひ登の蚊帳に來る
ゆがんだ顔で長い溜息ついてゐる

其ノ四 ビール、豫定、教練

豫定超過して興ざめの歸途
あきらめた戀へビールの香のあわ

ビールの泡に嬌笑の顔が浮き
夏は夏はビールの泡に乗つて來る

教練へ皆非常時の顔であり

豫定超過して興ざめの歸途
あきらめた戀へビールの香のあわ

ビールの泡に嬌笑の顔が浮き
夏は夏はビールの泡に乗つて來る

教練へ皆非常時の顔であり

豫定超過して興ざめの歸途
あきらめた戀へビールの香のあわ

ビールの泡に嬌笑の顔が浮き
夏は夏はビールの泡に乗つて來る

教練へ皆非常時の顔であり

豫定超過して興ざめの歸途
あきらめた戀へビールの香のあわ

ビールの泡に嬌笑の顔が浮き
夏は夏はビールの泡に乗つて來る

同 汀雨

同 汀雨

同 汀雨

同 汀雨

同 汀雨

同 汀雨

同 汀雨

同 汀雨

同 汀雨

同 汀雨

同 汀雨

同 汀雨

同 汀雨

同 汀雨

同 汀雨

同 汀雨

同 汀雨

同 汀雨

同 汀雨

同 汀雨

同 汀雨

同 汀雨

同 汀雨

同 汀雨

其ノ五 晝寝、浴衣、新、夏の夜、家庭

浴衣に着るげば蚊がもう來て
ねころべばすぐ唄になる濱涼み

すだれの風が午睡の夢を乗せ行き
風鈴へ新茶の香り好ましく

浴衣着た心へ廊の灯がともり
讀みかけの本を枕に晝寝する

こたゝの起る家庭に子ば元氣
風鈴鳴つて浴衣の肌ふる風

ビールの泡が盆にこぼれる新鮮味
一日の疲れ浴衣に忘れてる

水泳に疲れた千等の寝亂れて

章ニホン 泉

章ニホン 泉

章ニホン 泉

章ニホン 泉

章ニホン 泉

章ニホン 泉

章ニホン 泉

章ニホン 泉

章ニホン 泉

章ニホン 泉

章ニホン 泉

章ニホン 泉

章ニホン 泉

章ニホン 泉

章ニホン 泉

章ニホン 泉

章ニホン 泉

光笑會 (大阪)

十月十二日 於カナメ喫茶店 永田里十九報

策題 乳 兒 緑

ちのみ兒を前に遺産がどうのの
蒼空へ乳兒高く差し上げる

母の膺躍つて乳兒は呑んで居る
貰ひ乳に行き迄指をくはへさせ

乳兒はかへて浴衣でふるへてゐる
乳兒まだ寝ず乳兒のよく涙花節

生活難も知らず乳兒のよく花節
(佳)乳兒を抱く不貞の妻に泣き

(同)濡手乳兒を喰はひ直させる
(同)乳兒を背に女房よく歩るき

席題 すり泣き かほる

すり泣く聲が聞へる家庭劇
制服の袖が短かいすり泣き

きつぱりと別れて女すり泣き
寒豆遊 寒木

寒豆遊 寒木

寒豆遊 寒木

寒豆遊 寒木

寒豆遊 寒木

同綠同里紅禿
雨十九山

樂選

寒木

豆
秋

里十九

かほろ

綠雨

二 螢
柳

紅

艸

選

寒木

江秃
川

紅

、艸

小舟

里十九

豆
秋

1

朱
吾

一、珍珠
二、珍珠

互選

月 貧
未 兒

明珠

互選

高雄

夕焼を歌はせ母は得意がり
母親の足のおそさと歩く宵
母親の影は尊し夜を歸へる
吹く風に心ゆだれて母とある
ふるさとや母の乳房のあるところ
まぶたの母の思ひから風之夜や
此なこと疑がふ母の惜き日よ

同 同 同 同 同 同

席題話 清記互選

話さうか話すまいかとお茶がさめ
立話女らしさを失はず
待たされて同じ病氣はうまがあひ
ほんとにせすに女給の話きく
むづかしい話煙草が立ちこめる
親しさへ話の糸口さがしてゐる

同 同 同 同 同 同

席題軍艦 清記互選

子に聞かず話陸奥やら長門やら
病んでゐる子が軍艦を切りぬいて
非常時に喜ばされる軍艦旗

同 同 同 同 同 同

維吟

空なみだ流せば風のない眞暮
カラが汚れたれ都會の飾窓
病床吟

同 同 同 同 同 同

秋晴れに入浴する愚痴の聲
御見舞に答へて

同 同 同 同 同 同

面談の時丈けはなほつた氣持で居

川柳風呂(その八)

給料日 水谷鮎美報

家の灯があかるく見える給料日
夕焼を美しくみる給料日

静波
鮎美

給料日障子のやぶれめからのそき	給料日長い手紙を書いてゐる	紙幣束	紙幣束を舞妓の膝へ投げてやる	紙幣束へ思案はつづくばかりなり	紙幣束のほひ金庫の麗々し	停電へ紙幣束のあるそれつたげ	紙幣束へ妓の眼は涙とはなりぬ	雑吟	高架線屋根のむこふに白帆見へ月をみるころの秋となつたりな新調の服ですなほに歩くなり	秋	秋風にさつちりボタンかけるなり蟻を掌のにせて秋の空しろくうがひする瞳に秋の空は澄みへちまかさびしい秋の夕ぐれ硝子障子に秋の感觸	川柳 雜詠社	天王寺句會（大阪） 十月十日　於内藤製作所　福田鶴峰報	兼題　事務服	事務服はよく正午のパルコニー	事務服で表彰される東レ髪	事務服に着替へて朝の御あいさつ奮闘の意氣事務服を買つてから	事務服の暇屑をなほすなり	事務服を脱ぐと元氣になつてゐる	事務服のよんで電車の隅にゐる	事務服を着て町重にもを言ひ	壁のしみなどは事務服氣にしてす	
同	同	同	觀月	同	點美	同	同	遊步	同	靜太	同	同	雨選	綠	遊光	葉帆	南面子	鵲峰	變人	豆秋	同	同	白柳子

常盤津の師匠は派手な露路住居

同 散 歩 紫

光選 華村

ある風に散歩の女氣を取られただ散歩だけでは満足出来ぬ宵

喧嘩した後の散歩の黙り勝ち乙女等の笑ひをひらふ夜の散歩

(人) ちと帽子を冠りに冠り出る散步

(天) 宵散步町のネオンに浮く心

(天) 散策へ子のない秋がさみし

同 人 情 互

人情味見せて巡査愉しめる人情は俺の主義を入れなさんだ

解決へ人情づくで黙り泣き戦場の後には引けぬ貰ひ泣き

人情のいっしょに光る人情美人情のいっしょに過ぎし戀心

人情にもろく欺されつゝきなり

同 情 互

人情味見せて巡査愉しめる人情は俺の主義を入れなさんだ

解決へ人情づくで黙り泣き戦場の後には引けぬ貰ひ泣き

人情のいっしょに光る人情美人情のいっしょに過ぎし戀心

人情にもろく欺されつゝきなり

同 情 互

人情味見せて巡査愉しめる人情は俺の主義を入れなさんだ

解決へ人情づくで黙り泣き戦場の後には引けぬ貰ひ泣き

人情のいっしょに光る人情美人情のいっしょに過ぎし戀心

人情にもろく欺されつゝきなり

同 情 互

人情味見せて巡査愉しめる人情は俺の主義を入れなさんだ

解決へ人情づくで黙り泣き戦場の後には引けぬ貰ひ泣き

人情のいっしょに光る人情美人情のいっしょに過ぎし戀心

人情にもろく欺されつゝきなり

同 情 互

人情味見せて巡査愉しめる人情は俺の主義を入れなさんだ

解決へ人情づくで黙り泣き戦場の後には引けぬ貰ひ泣き

人情のいっしょに光る人情美人情のいっしょに過ぎし戀心

人情にもろく欺されつゝきなり

同 情 互

人情味見せて巡査愉しめる人情は俺の主義を入れなさんだ

解決へ人情づくで黙り泣き戦場の後には引けぬ貰ひ泣き

人情のいっしょに光る人情美人情のいっしょに過ぎし戀心

人情にもろく欺されつゝきなり

紫光

雷相

華村

田鶴緒

同 情 互

人情味見せて巡査愉しめる人情は俺の主義を入れなさんだ

解決へ人情づくで黙り泣き戦場の後には引けぬ貰ひ泣き

人情のいっしょに光る人情美人情のいっしょに過ぎし戀心

人情にもろく欺されつゝきなり

同 情 互

人情味見せて巡査愉しめる人情は俺の主義を入れなさんだ

解決へ人情づくで黙り泣き戦場の後には引けぬ貰ひ泣き

人情のいっしょに光る人情美人情のいっしょに過ぎし戀心

人情にもろく欺されつゝきなり

同 情 互

人情味見せて巡査愉しめる人情は俺の主義を入れなさんだ

解決へ人情づくで黙り泣き戦場の後には引けぬ貰ひ泣き

人情のいっしょに光る人情美人情のいっしょに過ぎし戀心

人情にもろく欺されつゝきなり

(人) 案山子稻はひき陽がゆれわた

(地) 群雀の囀り案山子は倒れて

(天) 案山子「お早う」朝が早い

同 髪 夢

髪にははして誰を待つ氣の未亡人

洋髪にしてから仲が深くなり

髪刈つてきて行くとのないバット

(佳) 髪を刈る音も冴えてる秋真晝

(同) 髪毛は顔を打ちぬく荒つぽ

(同) 髪毛のぬくみの戀でせう

(同) ひととみの髪暗めよとは言はず

同 肌 羅

眞黒く焦けしたる等秋となり

情熱がマダムの肌に觸れてゐる

アトリエのモデルは肌を撫で閑

(秀) さて肌色にぬりなへし肌

(同) 肌がだん／＼ゴム風船来た

同 情 互

人情味見せて巡査愉しめる人情は俺の主義を入れなさんだ

羅門

草路

羅門

比佐緒

草路

同 情 互

人情味見せて巡査愉しめる人情は俺の主義を入れなさんだ

解決へ人情づくで黙り泣き戦場の後には引けぬ貰ひ泣き

人情のいっしょに光る人情美人情のいっしょに過ぎし戀心

人情にもろく欺されつゝきなり

同 情 互

人情味見せて巡査愉しめる人情は俺の主義を入れなさんだ

解決へ人情づくで黙り泣き戦場の後には引けぬ貰ひ泣き

人情のいっしょに光る人情美人情のいっしょに過ぎし戀心

人情にもろく欺されつゝきなり

同 情 互

人情味見せて巡査愉しめる人情は俺の主義を入れなさんだ

解決へ人情づくで黙り泣き戦場の後には引けぬ貰ひ泣き

人情のいっしょに光る人情美人情のいっしょに過ぎし戀心

死す虫のせめて夕陽に光る羽

死の豫告が胸に鳴る情痴

都會病にふれじと吹ふ死の讀美

あまり好い女だつて死のうと思

極樂を信じる母は笑顔して

(一) 許されぬ戀へ二人は死を誓ひ

死の扉が僕の行く手に開けはな

あんな奴でも安らかに死んだら

芦の風奴の手を追はれ追はれ去に

思ふまいとする死を思ふ温度表

靈柩車が俺の前で故障だ

一すじの煙がゆらぐや死のんだ

人知れず買ふた其の夜の猫いら

死を思ふ水の色なり女なり

死を思ふ心に白き波頭

母性愛死を思ふ涙一つ二つ

あの時に死ればよかつたくるしみ

弱き心の死を思ふシーツの白き

同 情 互

同 情 互

人情味見せて巡査愉しめる人情は俺の主義を入れなさんだ

解決へ人情づくで黙り泣き戦場の後には引けぬ貰ひ泣き

人情のいっしょに光る人情美人情のいっしょに過ぎし戀心

人情にもろく欺されつゝきなり

同 情 互

人情味見せて巡査愉しめる人情は俺の主義を入れなさんだ

解決へ人情づくで黙り泣き戦場の後には引けぬ貰ひ泣き

人情のいっしょに光る人情美人情のいっしょに過ぎし戀心

人情にもろく欺されつゝきなり

同 情 互

人情味見せて巡査愉しめる人情は俺の主義を入れなさんだ

解決へ人情づくで黙り泣き戦場の後には引けぬ貰ひ泣き

人情のいっしょに光る人情美人情のいっしょに過ぎし戀心

人情にもろく欺されつゝきなり

同 情 互

人情味見せて巡査愉しめる人情は俺の主義を入れなさんだ

解決へ人情づくで黙り泣き戦場の後には引けぬ貰ひ泣き

人情のいっしょに光る人情美人情のいっしょに過ぎし戀心

混亂を前に社長邸しづかなり
 混亂して僕らの頭と僕の机と
 混亂しづめる剣もてといふ
 混亂の餘波裏町へ今移り
 混亂の打ち勝つ者が男です
 この混亂にしばし眼をとじて見
 輕氣球 風あり街の混亂よ
 混亂の足許に幸運光つて
 混亂の頭へ父の尖りやう
 生活なすり混亂の中に見て
 混亂の巻 救車が動き
 僕の足が 蟻を混亂させた
 富美三 昌一 白草 輝六 泥鈴 蜂啓 新水 鬼子

緑雨居偶會

名月十四日夜 東京句會の準備にお集りを
 願つた後で盃を手にしなから 名月の句を作
 る。(綠雨)

明月の姿をくだいて 船がゆく
 観月に妻子を宿においで出る
 醉さめの水名月を見直しぬ
 肩越しに名月を見る 病み上り
 明月に蛙もおらぬ 淋しい池
 観月に下る山を 醉ふてゐる
 小舟 鶴峰 豆秋 同 綠雨

艸樂居小集

十月四日昇る名月へ團子を頼張つて 四人
 が袋廻し

團子、屋上、出来心、鉄
 二人きりになると團子へ遠慮せず
 トランクと別に團子の包あり
 美しく生れ團子へ手が出せず
 艸樂 友帆 小松園

食べきしの團子バツトの手へく
 廣告部 その屋上の輕氣球
 屋上から別府通ひの船が見え
 出来心だけで はすまぬことになり
 出来心泣いて謝るばかりなり
 出来心その色合に眼を射られ
 出来心そつと後から戻しとき
 紅茶のむ戀もその夜の出来心
 出来心墓地のほとりてこぼかなり
 趣味と云ふ畑へ鉄の 大き過ぎ
 鉄の腰伸ばせば 花見電車行く
 白柳子 同 小松園 艸樂

潮騒刊行記念句會(大阪)

九月廿六日夜六時半より「潮騒」記念句會
 を端の坊に催す。東魚、紋太氏の如き久々の
 顔も見え、近來にない盛會で、初秋の夜を靜
 かに愚陀をしのぶよき會合であつた。

亂耽先づ挨拶をのべ、ついで萬よしの愚
 陀をしのぶ話、故愚陀母堂の聲涙共にする換
 拶があり、各選者還句發表の後、最後に路
 耶師「句集を中心として」といふ題のもとに
 師近來の身境よりひいて愚陀を失つた悼し
 さを葦乃夫人作の未發表の詩の朗讀を狭ん
 でなげかれ言々隻句涙ならざるなき講演を
 され、會する者一同暗然として打たれた。

兼題 日向 向路 耶選

鯛干す日向へ祖母は置いとかれ
 日向に座せば竹藪が見えてゐる
 なんとなく日向淋しい月見草
 何もかも忘れたい氣で日向に居
 日向にせめてひと時つきよを忘らん
 起堂 花曙 あや美 立六 變人

魂は日向にゆらり 消え
 もう何も言はず日向のすきな父
 逃げかける日向へ毛布かけに来る
 鉢巻で秋の日向を撒水車
 好い日向夫婦の茶碗洗ふてゐ
 遠乗へ日向の風 菜と蔭の風
 うつろなる日向に煙くゆるなり
 日向臭い子供に頭なで廻し
 サンルーム金魚を出て遠からず
 ハーゲンベンクにて

日本は日向に麒麟天を向き
 日向の柘榴目を割る行くも一つ
 日向の通りに曲り行く汽車
 老いて尙不即不離なり日向ぼこ
 (人)よき日向馬が儲けてくれる
 (地)走つて行けば誰もゐない日向
 (天)叱られた身に有難き日向なり
 (軸)あゝ日向五尺の影と知るも憂し

席題 船出
 日本晴 船出の 唄の 筋肉美
 送り手が僕に一人も ない 船出
 たらひ迄と思ふアラワル 移民群
 出帆へ明らかな 聲泣いた 聲
 兩方のボケツにバツトある 船出
 見送りへ期待の 瞳船に 待ち
 父と子船出に 雨も 波もよし

満洲の土となる氣の 船出の日
 船出する港の朝が すすむなり
 一さいの過去を忘れて 船出する
 船出して波のうれりへ 親みぬ
 更生の一步故郷を 船出する
 佳紫 千代 子木 鉢美 夢裡 夢裡 失名 舟々 角丸 小柳 路郎 亂耽 鳥語 舟々 亂耽 東魚 氷炭 新水 春光 櫻天 貼美

加してくれてうれしかつた。(天痴人報)。

席題 青 波 選

事務室に失策となる青インク
青空に届かん子らの運動場
(秀)自由畫の青い所は深い海

同 青 柳 人 月

(同)青息が赤い灯に染まり
(同)青春を劫て赤い灯に染まり
(同)青葉が繁り鋪道の殘暑です

同 青 柳 人 月

―(五・一五事件)―

(同)青春の血は逆捲く酌情論
(同)叛逆に近く青年意氣があり

同 青 柳 人 月

波が俺をなにしたん胡座かく岩
幻想となる涙の色、涙の色
波際で戯れてゐる恢復期

同 青 柳 人 月

堂島の餘波へ小地主の吐息
席題 旗のある風景 卷二 莞路共選

凱旋へ裏町のこの日章旗
町を行く旗行列は聲をはり

同 青 柳 人 月

聯隊旗子供に不足な色に
日章旗今日ハンマーは響かない

同 青 柳 人 月

應援旗の渦から湧いて来る
日の丸の旗なら書ける一年生

同 青 柳 人 月

馬打って打って仲仕に日が暮れる
空馬車へ乗って村の子朗だ

同 青 柳 人 月

馬車馬が二頭續いて陽が落る
馬車馬が動かない鋪道の殘暑

同 青 柳 人 月

青草に伏せて軍馬にある餘裕
妻も子も忘れた顔が馬券買ふ

同 青 柳 人 月

遠乗の三番目のは令夫人
席題 松本青波君を送る 天痴人選

軍靴の譜に君の手を握る
歡送へ友、朝露の中に立ち

同 青 柳 人 月

姫路の原つばに似合ふだる軍服
感 吟

鳥根つ兒だ拳骨なんぞで平太振を
行きたまへ第一線が君を待つ

同 青 柳 人 月

しばらくは鉄と別れて生き給ひ
(軸)萬歳を腹のどん底から叫ば

同 青 柳 人 月

明 珠 居 偶 會 (神戸)
九月十三日 西村明珠報

海邊風景 互
潮風が波止場の車夫に吹いて來た
カーテンの風も海岸ホテルなり

同 青 柳 人 月

もう動くべし車掌の氣が動き
充分に泣かせて置いた發車ベル

同 青 柳 人 月

發車信號雲は故郷に残つてゐる
假事務所

同 青 柳 人 月

今晩の電氣を頼のむ假事務所
假事務所下駄で奥まで許される

同 青 柳 人 月

假事務所どの鉛筆も折れてさし
假事務所サイダの瓶に花をさし

同 青 柳 人 月

川 柳 さん ぎ り (一)
夜的女、壁 鳴田翠峯報

送られる女はばかり様もなく
舟々

學成らず夜の女に突き當り
女の笑が床一ぱいにひろがる

同 青 柳 人 月

獨りゐて何にかを壁がせまるよう
新築の壁のほひと木のほひ

同 青 柳 人 月

壁一重の安價な雰圍氣
川 柳 吹揚吟社句會

同 青 柳 人 月

昭和八年九月廿三日 渡邊曉童報
會場 伊豫相互貯蓄銀行支店樓上

柳 翁 忌 追 悼 吟
桐一葉々々今年も柳翁忌

同 青 柳 人 月

秋空の星の中なる柳翁忌
閏年片割れ月や柳翁忌

同 青 柳 人 月

深い根のあつて柳の伸びしげり
菊の香に満てん今日の川柳

同 青 柳 人 月

津々浦々しげる柳を翁知るや
野本喜峰大人追悼吟

同 青 柳 人 月

桐一葉柳の影の消へて秋
思出は鹿島の夜の白髪よ

同 青 柳 人 月

共に鹿島の鹿も啼いて呉れよう
柳一枝折れて風道を惜しまれ

同 青 柳 人 月

思ひ出は鹿島の夜の蚊に惱み
渡し舟名残りの盡きぬ人を乗せ

同 青 柳 人 月

曉の鹿島の夜が別れて
早々の句調も今は耳の底

同 青 柳 人 月

黄昏を歸る女工の束ね髪
或る夜はマリヤに近き束ね髪
夏やせを言つてゐる同志束ね髪
伊達巻で風の音聞く束ね髪
(人)束ね髪男の道行かん束ね髪
(地)小春日の窓に寄り添ふ束ね髪
(天)生涯を祥に捧げし束ね髪
(軸)巡航船乗つた女の束ね髪

宿題 華 竹 楓選
正装をこらし吾身を忘れてゐる
華やかに高座は羽織ぬいてゐる
華やかな夢をつゝんだコンパクト
華やかな過去へ目つむるベツト

鐵骨すくつと都會の地鳴りに
鐵骨の音高らかに新開地に
鐵骨に派助柱秋をなき
鐵骨を見上げて夜釣念屈た
一響く鐵骨は築く文明の音
鐵骨に黒くうごめくテロリスト
鐵骨におしちぶされし人生ぞ
鐵骨にぶつけて死んだら嬉しかる
鐵骨の底で喘でゐるカード
ため息に鐵骨見上げられてゐる

雨音もなく線香の香
日記途切れて雨だれの音
うつとりと雨に心をたわれる
ヘッドライトの輻し小雨が降くる
雨勢はげしく天井をみる

灰皿の掃除をしとく日曜日
日の丸を出して障子の中にある
細き眉の女日盛りを行く
毎日の仕事に馴れて金を蓄め
吉日は親にまかして宵を出る

葡萄一つ一つのまろきボーズ
葡萄棚海へつゝいて貸別荘
葡萄吊して食慾を待つ病床
葡萄の艶は處女の乳豆の如く
(病身の姉)

傾杖へ半分書いた便箋紙
傾杖の思案結極眠くなり
傾杖は蟻の行く手をみつめて
傾杖に赤字打開の策も出ず

噴水のまわりは晩の濟んだ顔
水浴びて日に日に神經質となり
争ひを水にながした眼の疲れ
女こゝろ水の深さへ思ひつめ
(軸)公園へ來て水蓮に親しみぬ

熱血の鉄振り上し若者よ
ぶつかつてぶつかつて行け若者よ
若者よサア蒼空へ手を伸ばせ
若者は戀を發して濱は秋
若者よ今非常時に起て走れ
若き血のごとくへ慰さん酒女
軍國の春若者の靴に鉄

席題 雨 讀上 互選
雨音もなく線香の香
日記途切れて雨だれの音
うつとりと雨に心をたわれる
ヘッドライトの輻し小雨が降くる
雨勢はげしく天井をみる

席題 野 春 秋選
煽情の風が野心の顔へくる
新らしい煙草へ野球チャンスなり
野心家のすゝめる葉巻吸ふてみる
席題 水 華 水選
噴水のまわりは晩の濟んだ顔
水浴びて日に日に神經質となり
争ひを水にながした眼の疲れ
女こゝろ水の深さへ思ひつめ
(軸)公園へ來て水蓮に親しみぬ

葡萄酒の香へなれて女ある
席題 若 者 祥 月選
熱血の鉄振り上し若者よ
ぶつかつてぶつかつて行け若者よ
若者よサア蒼空へ手を伸ばせ
若者は戀を發して濱は秋
若者よ今非常時に起て走れ
若き血のごとくへ慰さん酒女
軍國の春若者の靴に鉄

席題 傾 杖 互選
傾杖へ半分書いた便箋紙
傾杖の思案結極眠くなり
傾杖は蟻の行く手をみつめて
傾杖に赤字打開の策も出ず

席題 水 華 水選
噴水のまわりは晩の濟んだ顔
水浴びて日に日に神經質となり
争ひを水にながした眼の疲れ
女こゝろ水の深さへ思ひつめ
(軸)公園へ來て水蓮に親しみぬ

葡萄酒の香へなれて女ある
席題 若 者 祥 月選
熱血の鉄振り上し若者よ
ぶつかつてぶつかつて行け若者よ
若者よサア蒼空へ手を伸ばせ
若者は戀を發して濱は秋
若者よ今非常時に起て走れ
若き血のごとくへ慰さん酒女
軍國の春若者の靴に鉄

席題 傾 杖 互選
傾杖へ半分書いた便箋紙
傾杖の思案結極眠くなり
傾杖は蟻の行く手をみつめて
傾杖に赤字打開の策も出ず

席題 水 華 水選
噴水のまわりは晩の濟んだ顔
水浴びて日に日に神經質となり
争ひを水にながした眼の疲れ
女こゝろ水の深さへ思ひつめ
(軸)公園へ來て水蓮に親しみぬ

葡萄酒の香へなれて女ある
席題 若 者 祥 月選
熱血の鉄振り上し若者よ
ぶつかつてぶつかつて行け若者よ
若者よサア蒼空へ手を伸ばせ
若者は戀を發して濱は秋
若者よ今非常時に起て走れ
若き血のごとくへ慰さん酒女
軍國の春若者の靴に鉄

席題 傾 杖 互選
傾杖へ半分書いた便箋紙
傾杖の思案結極眠くなり
傾杖は蟻の行く手をみつめて
傾杖に赤字打開の策も出ず

席題 水 華 水選
噴水のまわりは晩の濟んだ顔
水浴びて日に日に神經質となり
争ひを水にながした眼の疲れ
女こゝろ水の深さへ思ひつめ
(軸)公園へ來て水蓮に親しみぬ

葡萄酒の香へなれて女ある
席題 若 者 祥 月選
熱血の鉄振り上し若者よ
ぶつかつてぶつかつて行け若者よ
若者よサア蒼空へ手を伸ばせ
若者は戀を發して濱は秋
若者よ今非常時に起て走れ
若き血のごとくへ慰さん酒女
軍國の春若者の靴に鉄

席題 傾 杖 互選
傾杖へ半分書いた便箋紙
傾杖の思案結極眠くなり
傾杖は蟻の行く手をみつめて
傾杖に赤字打開の策も出ず

席題 水 華 水選
噴水のまわりは晩の濟んだ顔
水浴びて日に日に神經質となり
争ひを水にながした眼の疲れ
女こゝろ水の深さへ思ひつめ
(軸)公園へ來て水蓮に親しみぬ

葡萄酒の香へなれて女ある
席題 若 者 祥 月選
熱血の鉄振り上し若者よ
ぶつかつてぶつかつて行け若者よ
若者よサア蒼空へ手を伸ばせ
若者は戀を發して濱は秋
若者よ今非常時に起て走れ
若き血のごとくへ慰さん酒女
軍國の春若者の靴に鉄

席題 傾 杖 互選
傾杖へ半分書いた便箋紙
傾杖の思案結極眠くなり
傾杖は蟻の行く手をみつめて
傾杖に赤字打開の策も出ず

席題 水 華 水選
噴水のまわりは晩の濟んだ顔
水浴びて日に日に神經質となり
争ひを水にながした眼の疲れ
女こゝろ水の深さへ思ひつめ
(軸)公園へ來て水蓮に親しみぬ

葡萄酒の香へなれて女ある
席題 若 者 祥 月選
熱血の鉄振り上し若者よ
ぶつかつてぶつかつて行け若者よ
若者よサア蒼空へ手を伸ばせ
若者は戀を發して濱は秋
若者よ今非常時に起て走れ
若き血のごとくへ慰さん酒女
軍國の春若者の靴に鉄

席題 傾 杖 互選
傾杖へ半分書いた便箋紙
傾杖の思案結極眠くなり
傾杖は蟻の行く手をみつめて
傾杖に赤字打開の策も出ず

席題 水 華 水選
噴水のまわりは晩の濟んだ顔
水浴びて日に日に神經質となり
争ひを水にながした眼の疲れ
女こゝろ水の深さへ思ひつめ
(軸)公園へ來て水蓮に親しみぬ

葡萄酒の香へなれて女ある
席題 若 者 祥 月選
熱血の鉄振り上し若者よ
ぶつかつてぶつかつて行け若者よ
若者よサア蒼空へ手を伸ばせ
若者は戀を發して濱は秋
若者よ今非常時に起て走れ
若き血のごとくへ慰さん酒女
軍國の春若者の靴に鉄

川柳 神戶部友會

十月八日 於明珠居 明珠報

兼題 感謝 謝 二 南選

大空へ感謝の眼閉ちてゐる
松の根にかけて感謝の波の音
忠告へ酔ふて居たのを悔いて居る
肉身へ感謝の言葉云はすゐる

明 珠 華 水 同 吉 左 右 珠

九月廿日の夜國城荒路居にて句作に耽る。

いかだ詩社例會 (松江)

岡崎 祥 月 報

席題 私生兒 梟 人選

私生兒よ泣くな母には罪があり
打明けん心の懺み私生兒だ
私生兒と云ふ名冷たく三昧を抱き
眞暗だ私生兒と知つた夜

鐵骨すくつと都會の地鳴りに
鐵骨の音高らかに新開地に
鐵骨に派助柱秋をなき
鐵骨を見上げて夜釣念屈た
一響く鐵骨は築く文明の音
鐵骨に黒くうごめくテロリスト
鐵骨におしちぶされし人生ぞ
鐵骨にぶつけて死んだら嬉しかる
鐵骨の底で喘でゐるカード
ため息に鐵骨見上げられてゐる

外交は上手もみ手のくせを持ち 蒼二

ひかり集 (その十八)

日本人

水谷鮎美報

血を骨を晒す魔野を見つめたり ト 居

日本人トマトになれて羨なし 同 同

秋は澄む日本人に生きて嬉し 同 同

櫻咲く國の光りに生ひたちぬ 鮎 美

軍神へ櫻をそへる大和魂 同 鮎

川柳風呂 (その十)

黄昏、糸、秋

水谷鮎美報

黄昏に子供が泣いて戻るなり 觀 月

黄昏の歸りがおそいななり 同 同

黄昏のうれしい帯を結ぶなり 同 同

糸巻いてそれから主婦の友を讀み 同 同

掛茶屋にはつきり秋が訪れる 同 同

ボスターの娘に黄昏れる獨りもの 同 ト

木蓮は匂ふ暗着の仕付糸 同 同

黄昏てからの談に火のこゝろ 同 鮎

黄昏の花火に戀のおもひ出よ 同 同

白菊のほふ庭からたそがれる 同 同

白糸のしろく僕を嗤ふなり 同 同

幸福の糸くるくるとほごけゆく 同 同

氣嫌なほせば秋は寂しい 同 同

湯上りの秋ひとほにせまりくる 同 同

つどひ 第拾七回 姫田夕鐘報

時

嚴然と時の解決待つばかり 水 車

發車べる未だその窓へとり縫り 同 鐘

これだけの時間つぶしてまゐらず 夕 鐘

時なんか問題ぢやない君と僕 同

川柳御旅觀月句會 (大阪)

維誌社

十月四日夜 於空堀靜樓 生田翠夢報

此日上々吉の天氣、一點の雲もない大空

には名月皓々として冴え五十疊の座敷に同

志七名いささか心細き感ありたり。

席題 屋 根 翠 夢 選

東みても西みても灰色の屋根 夢 選

屋上で待つてゐるのに手が抜けず 夢 選

煉炭の火で焙るよな戀に 夢 選

粉炭くべて十年前を語る夜半 夢 選

一ときの歡喜か炭の赤くなり 夢 選

火も埋めて湯に行きますと走り 夢 選

(人)炭あかと思は遠し君の事 夢 選

(地)そこ退げと炭をはだ不器用 夢 選

(天)こは炭かこは火かたは灰なる 夢 選

兼題 雜 吟 清記 互選

日記帖君の面影またうがび 夢 選

食堂へ丸髯で來て落ちつかず 夢 選

世辭と知りつゝ兒の語兒の話 夢 選

利己的な愛になつたが口惜しう 夢 選

何時の日か又遇ふ人の影を抱く 夢 選

兼題 退 院 苦樂公選

退院のそれほご世間すきでなし 夢 選

片假名の葉書退院祝つて來 夢 選

退院へまだ三日目に來いと言ひ 夢 選

(人)八卦見を信じ退院日を數へ 夢 選

(地)プロマイドで退院出來ぬな 夢 選

(天)佛滅をさけて退院長く晴れる 同

(軸)退院へ親友といふ世話をやき 苦樂公

席題 押 賣 互選

押賣と見れば案外いゝ男 杏 林

押賣をうまくさばいて子があやし 伊 八

押賣の藥きよとも思はれ毛 喜 山

押賣の鐘で話す牡丹刷毛 九 天

席題 洗 濯 清記 互選

(六)洗濯の母へとんぼをせがむ 九 天

(五)いゝ女房襪襪を洗ふ事が好き 苦樂公

(四)洗濯の手際がよくて子が二人 伊 八

(三)洗濯の足袋にけなげな女事務 喜 山

新妻は仕事始めに洗濯し 杏 村

席題 制 服 清記 互選

(七)制服をよりと捨て、職がなし 吞 舟

(六)制服を脱げば話もくだけて來 村 夫

制服の綻びたまゝ、特待生 苦樂公

(五)代表で行く制服の折目なり 九 天

制服の破れ大さく叔父を問ひ 伊 八

(四)制服のポケットに秘めた戀の文 九 天

宿簪へ古い制服下駄で來る 村 夫

制服を脱いで子供の馬になり 村 夫

轉 居

前田雀郎君(東京市本所區向島三丁目十八

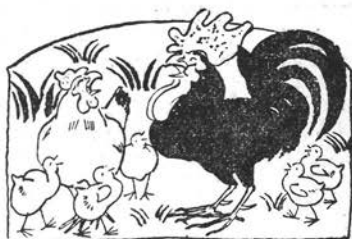
番) 七上 一信君 東京市荒川區日暮里一ノ一七

番) 梅田千秋君(京都市富小路三條下ル奥井方

番) 加能川柳社(石川縣石川郡出城村字成へ)

前 號 正 誤

二三頁光衛子の誤り



編輯の窓 山雨樓

▼柳壇待望の「東京句會」が關東川柳家諸方の壓倒的な聲援と賛助によつて、非常なる盛會裡に開かれたことは、忘るゝことの出来ない感謝であつた。

▼「東京句會」が斯く盛況を告げ極めて有意義な收穫を納めたことに就て、東都川柳家を始め各地柳友諸兄から澤山の讃辭と反響の言葉を頂き、主幹を始め社中一同嬉し涙を禁ずることが出来なかつた。

▼本誌は「東京句會」に依つて齎された全國川柳家諸君の厚

意と同情に應へるべく、今後益々誌面の刷新と充實に努力して邁進することを期してゐる。

▼高木角戀坊氏は本社「東京句會」に是非出席せられる筈の處、當日御病氣の爲め、殘念乍ら缺席するとの鄭重なる御便りがあつた。御厚意を深謝する次第である。

▼本號の表紙は柴谷榮舟畫伯の筆になるもの、特に味つて頂きたい。因に本誌創刊號と百號記念號も同畫伯の筆で記録は特に深い。

▼お馴染の長野吉高氏から、主幹の「五七五の翻譯」が多大の反響を齎したとて、御病氣中特に寄稿を頂いた。これは氏の深淵なる蘊蓄の一端を示された好文字である。文壇人の必讀を祈る。

▼本號を「東京句會記念號」としたため非常に記事が輻輳したもので、遺憾乍ら次號へ割愛した原稿が少くない。川柳バイロット

欄の如きも同様の都合で本號は休載することにした。この點不惡御諒承を願つておく。

▼本號一路集へ掲載すべき大島清明氏選「煙」は選稿未着の爲め次號掲載豫定の前田五健氏選「壁」を發表することにした。御諒承を乞ふ。

▼愚陀、亂就句集「潮騒」の出版が非常なる好評を呼んでゐるのでこれに關する反響を本號で發表する豫定であつたが誌面の都合で愚陀の一周忌相當する十二月號に譲ることにした。

▼十月十七日玉造支部句會が東雲俱樂部で開かれ當夜は、東京から歸阪されたばかり、路郎先生と北陸から旅の久流美氏とが突然出席されたので、非常な喜びに輝いた。

▼路郎先生には病氣を押して「東京句會」の爲め東上せられたところ、幸ひ元氣を恢復されて恙なく總帥としての任務を果し十六日の夜行で歸阪せられたのであるが、御歸阪後一週間はご経つてから漸く疲れが出て目下靜養せられてゐる。

▼十月十七日金澤の久流美氏が

ひよつくり不朽洞を訪問され、折よく歸阪せられたばかりの路郎先生と何年振りの歡談にふけられた由、尤も久流美氏は酒を止してゐられるので其の點甚だ淋しかつたと主幹は脾肉の嘆を洩らしてゐられた。

▼十月二十九日の夜、御旅支部句會が開かれた。當夜も主幹が欠席されたので淋しかつたさうだが、東京からの武田玄六氏來阪を機とし出席されたので散會後、同氏と共に綠雨、琴人、翠夢の諸君が痛飲せられたさうである。

▼十月二十六日の夜、大阪中央公會堂小會議室で、川上日車、黒木鶴足兩氏の句集刊行記念句會が開かれた。路郎主幹は兩氏に最も懇意ではあるが、「東京句會」の疲れて不快の折柄欠席されたわけである。主幹が欠席されると、すぐにデマが飛ぶのはおかしい。

▼石川縣の川柳家松島みどり葉氏が十月二十六日滿洲からの歸途不朽洞を來訪せられ、路郎先生と綠雨君と歡談されたさうである。

投稿規定

- ▼投句は總て葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。
- ▼「近作柳樽」は全家の雜吟を募る
- ▼「川柳塔」への投句は 人及び社友に限る。
- ▼各地會報は半紙判の原稿紙に清記の事。
- ▼文章は二十字詰半紙判原稿紙に詰める事。
- ▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記する事。
- ▼締切は嚴守されたし。
- ▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入の事。

募

集

第十一卷第一號課題

十一月五日締切

(各題十句以内)

▼寶石

關本雅 幽選

▼命令

吉田水車共
西村明珠選

第十二卷第二號課題

十二月五日締切

(各題十句以内)

▲向上

朝田新 水選

▲繙帶

中澤濁 水選

每號募集

▼近作柳樽

麻生路郎選

▼各地柳壇(會報)

▲文章(評論研究感想吟行漫文)

社告

社務一切(編輯に關する件、投句、購讀廣告)の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます。

定價

一部 金參拾錢
半箇年前金(特輯處共)壹圓八拾錢
壹箇年前金(特輯處共)參圓六拾錢

廣告料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいませれば御相談に應じます

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中にでも頂ける様に願ひます、但集金郵便(一年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和八年十月廿五日印刷

昭和八年十一月一日發行

第十卷 第十一號
(毎日一回一日發行)

編輯兼發行印刷人 大阪府西成區玉出本通三丁目三六番地 麻生路郎

發行所 大阪府西成區玉出本通三丁目三六番地 柳難誌社

事務所 大阪府住吉區平野西之町八三番地

川柳雜誌社

振替大阪七五〇五〇番
電話天王寺一六六七番

賣場

(大阪) 大賣捌二盛社書店 (明文堂其他 市内 各書店)
(東東仲見世) 玉森堂 (神戸) 米田、寶文館 (函館) 石塚
(京都) 三宅 (名古屋) 靜觀堂

川柳雜誌案内

六號活字十四字詰三行金五十錢、一行増すことに金十錢但し前金切手代用可改號・移轉、句會案内、柳書廣告、その他

年賀名刺廣告募る

▼一口五拾錢
幾口でも申込んで下さい。一頁希望の方に限り金七圓。一口分原稿はなるべく簡単に願ひます
▽申込期限 十二月十日迄
(一月間に掲出)

川柳雜誌社

大阪市住吉區平野西之町八三
振替大阪七五〇五〇番
廣告申込は成るべく振替を御利用の上前金に願ひます。(三錢以下の切手代用でも差支ありません。)

川柳雜誌投句用箋

本社制規の投句用箋を左の價額でお頒ち致します。なるべく此用箋を御使用下さい。
五〇枚綴一冊 價(金拾二錢)(送料共)
▼御申込は本社事務所宛。
(一錢切手代用不苦)

道アラから天牛へ
書籍 天牛本店
大阪市南區日本橋南詰東入南側(電話南二七四九番)

喫茶店 キンダ
大阪市西成區玉出、通三ノ三(仲小路)
電話 二五七九番

喫茶店 クーリン
大阪市西成區旭北通二ノ一但シ萩の茶屋驛西へ突當り南へ半丁西側

カナメ喫茶店
朝らかな心と愉快な顔はカナメ喫茶店
大阪市南區疊屋周防町東入南側

贈寫版印刷
美術的印刷法發見
オザキアトリエ
大阪市西區南堀江下通二ノ六
電話櫻川一四八九番

加茂川句會

日時 十一月十日(金)午後六時半
會場 仲源寺(京都四條繩手東入)
兼題「少女」三句 司郎選
兼題「玩具」三句 新水選
會費 金參拾錢
京都市嵐山天龍寺前平岩方京都支部

川柳雜誌社 創立句會

今里支部
日時 十一月十一日夜六時半
會場 端ノ坊(清水町電停西へ入)
兼題「天才」三句 路郎選
「父」三句 山雨樓選
(兼題各天、地、人呈賞)
會費 二十錢
(幹事)水車、鮎美、里十九、夕鐘
鶴峯、豆秋

主催 川柳雜誌社今里支部
東成區片江町四五吉田水車方
後援 川柳雜誌社梅田支部
川柳雜誌社天王寺支部

光 笑 會

(日時) 十一月十三日夜
(所) カナメ喫茶店
(題) 「戦死」
(幹事) 大阪市南區疊屋町六
幹事 永田里十九

天王寺句會
日時 十一月七日夜六時半
題「青春」三句
山本葉光宅
天王寺區俗人町八四
(天王寺西門停留場北平丁入初メノ辻北入)

懸賞川柳募集

題「辛抱」 路郎選
十一月十日締切
その他難吟を募る
▼用紙 官製ハガキ(化粧柳聖と明記の事)
▼賞品 秀逸數句薄謝を呈す
▼投吟所 大阪市玉出本通三の三六
麻生路郎氏宛
化粧新聞社

懸賞喫茶柳壇

題「ストロブ」豆秋選
十月十五日締切
▼用紙 官製ハガキ(喫茶柳壇と明記の事)
▼賞品 秀逸數句薄謝を呈す
▼投吟所 大阪市玉出本通三の三六

喫茶新聞社

川柳手拭 路郎主幹
の染筆 二種 金三拾錢
(送料共)

(順はろい)

川柳雜誌社關係人々

賛助員

客員

池澤樂居 長谷川一徹 岡本弘平 岡本直方 笠原路生 嘉納純二 田中辰秀 長崎柳秀 長岡牛太 國枝史郎 藤村史郎 藤本卯之助 赤井清司 淺田清一 末弘嚴太郎

伊藤彦造 島田清一 大谷五花 岡田三子 龜井三太 川上三太 川村あん 米村あん 吉村孝之 田村孝之 谷脇素文 窪田銀波 長野吉高 安川久流 前田五健

社

柴谷榮舟 篠原春雨 蛭子好古 藤里東魚 森友 生田翠夢 石曾根民郎 市塲没食子 春元紀太 西村山月 友淵貴山 大西八歩 谷村登美坊 立井おさ 中見光路

中澤濁裡水 村松夢水 桑原雨迷 山下柳子 增位汀柳 奥野禿山 熊谷紅 江戶一杉 阿形圓角 櫻山圓角 北山悟郎 喜多春秋 岸上錦石 宮輪白峰 三輪夏曉 水谷鮎美 平井蒼太

同人

阿部閑生 關本雅幽 日野華水 妹崎豆秋 須崎楓 首藤竹楓 岩崎柳路 山本綠雨 橋本綠雨 松丘町二 福田山雨樓 福田鶴峰 高橋かほる 吉田水車 永田里十九 楊井二南 松盛琴人 朝田新水 麻生路郎

道頓堀支部(大阪市)幹事庄 萬よし 九三舎支部(大阪市)幹事北山 神戶支部(神戸市)幹事西村 函館支部(函館市)幹事龜井 高知支部(高知市)幹事小松 梅田支部(大阪市)幹事水谷 釜ヶ池支部(大阪府)幹事龜井 田邊支部(和歌山)幹事辻 篠川支部(愛知縣)幹事白井 豐橋支部(愛知縣)幹事平岩 京都支部(京都市)幹事平岩

鳥取支部(鳥取市)幹事中島 堺支部(堺市)幹事八木 松山支部(松山市)幹事河合 守口支部(大阪府)幹事朝田 高岡支部(富山縣)幹事越田 天竺支部(大阪府)幹事福田 鶴町支部(大阪市)幹事尾 御池橋支部(大阪市)幹事松 松江支部(松江市)幹事奈良井 塗青支部(大阪)幹事熊谷

西條支部(愛媛縣)幹事荒井英賀夫 光耀會(大阪)幹事竹內機見女 萩ノ茶屋支部(大阪)幹事奥野 北濱支部(大阪)幹事吉田 今里支部(大阪)幹事江戶 奉天支部(奉天)幹事平塚 八東支部(奉天)幹事江戶 野上支部(和歌山)幹事添修 玉造支部(大阪)幹事清水友帆 今治支部(今治)幹事渡邊曉童 光笑會(大阪)幹事永田里十九

大正十三年三月三日第三種郵便認可（毎月一回一日發行）
昭和八年十月廿五日印刷
昭和八年十一月一日發行

川柳雜誌（第一一八號）

定價金三十錢

養榮の髪毛ぬせ戟刺を髓腦

ドーマポ椿豆伊^ヰ

精の椿島大 一唯産國

輝く美髪



伊豆椿香油本舖

いさ下用愛御に直今
りあに店薬品粧化名有國全